

秋田県文化財調査報告書第 524 集

峰吉川中村遺跡（第2次）

—雄物川上流河川改修事業(中村芦沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II—

2022・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土
の「岩偶」です。
縄文時代晚期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

みね よし かわ なかむら

峰吉川中村遺跡（第2次）

—雄物川上流河川改修事業(中村芦沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

2022・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,100か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財は県民が地域の歴史や伝統を理解し、ふるさと秋田への誇りや愛着を高めていく上で、欠くことのできないものであります。

一方、雄物川中流部においては度重なる浸水被害への対策として、堤防整備を推進する河川改修事業が行われています。本教育委員会では、こうした災害対策事業との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに銳意取り組んでおります。

本報告書は、雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に先立って、令和2年度に大仙市において実施した峰吉川中村遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、古代の竪穴状遺構、中世の井戸跡・カマド状遺構、近世の土坑などが見つかり、古代から近世にかけて、人々が雄物川流域の川沿いで営んだ暮らしの一端が明らかとなりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市観光文化スポーツ部など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

秋田県教育委員会

教育長 安 田 浩 幸

例　言

1 本報告書は、雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に伴い、令和2年度に調査した、大仙市所在の峰吉川中村遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2 調査要項

遺　跡　名　峰吉川中村遺跡（みねよしかわなかむらいせき）

遺　跡　略　号　7 MYKNM

遺　跡　所　在　地　秋田県大仙市協和峰吉川中村字中村15-8外

調　査　期　間　令和2年8月19日～10月31日

調　査　面　積　803m²

調　査　主　体　者　秋田県教育委員会

調　査　担　当　者　高橋　和成（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主査）

　　　　　小松　和平（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主査）

総　務　担　当　者　柴田　卓也（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和2年度

　　　　　川本健太郎（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和3年度

　　　　　柴田　優（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和2・3年度

　　　　　皆川　哲（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主任）令和3年度

　　　　　渡辺　昂（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主事）令和2年度

調　査　協　力　機　関　国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会

3 第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図『刈和野』（平成21年発行）、第4図は、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供の1/1,000工事用図面をそれぞれ元に作成した。

4 発掘調査及び整理作業における以下の作業は、下記の業者に委託した。

水準測量及び方眼杭設置業務：有限会社 佐藤測量事務所

遺跡空中写真撮影：株式会社 みどり光学社

5 理化学的分析は放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

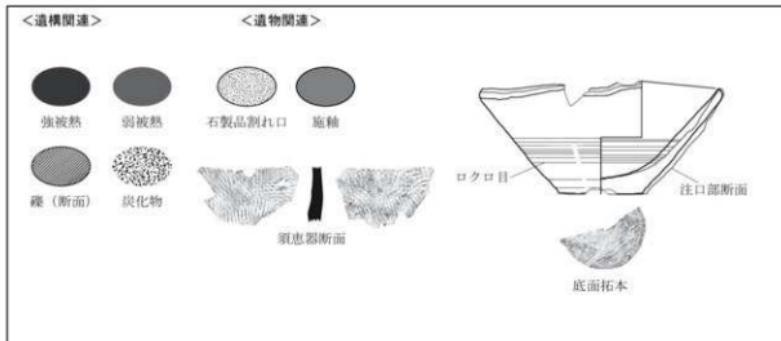
6 本書の執筆は、第3章を高橋、小松が行い、それ以外は高橋が行った。第4章は委託分析調査報告を高橋が編集し、掲載した。

7 発掘調査及び整理作業において、ご指導・ご助言を賜った以下の方々に記して感謝申し上げます。
利部修、島田祐悦、星宮聰仁、水澤幸一（五十音順）

凡 例

- 1 本報告書に掲載した平面図(遺構実測図)の方位は、世界測地系平面直角座標第X系による座標北を示す。座標北から磁北の偏角は西偏7°5'である。
- 2 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には、精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構に用いた略記号は次のとおりである。

S K I : 壁穴状遺構 S E : 井戸跡 S O : カマド状遺構 S D : 溝跡
S K : 土坑 S K P : 柱穴様ビット
- 3 遺跡基本層序はローマ数字で、遺構内層位はアラビア数字で表記した。また土色記述には農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 4 遺構の法量について、〔 〕・()内の数値は、それぞれ残存値・復元推定値を表す。
- 5 遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールバーを付して縮尺を表示した。
- 6 遺構実測図中に十字記号とともに併記されるグリッド記号の「+」以下の英数字は、各グリッド杭からの方向及び距離を示している。それぞれEWSNは東西南北を示し、例えば「MA50+W2.0m」であれば、MA50杭から真西に2 mの地点であることを示す。
- 7 土器・陶磁器の破片実測図は、古代の土器は左から外面-断面-内面の順で記載しているが、中世以降の陶磁器に関しては、内面-断面-外面の順で掲載している。また、須恵器については、断面の網掛けにより区別している。
- 8 須恵器系陶器の器種分類は吉岡康暢『中世須恵器の研究』に依り、鉢類は卸し目を有するものを含め片口鉢としている。
- 9 写真図版の遺物については、実寸の約40%の大きさを基本としているが、遺物No. 35については任意、鉄関連遺物については約2/3で掲載している。
- 10 遺構図・遺物図の網掛け、調整等の凡例は次のとおりである。



目 次

序	
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
表目次	v
図版目次	vi
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
1 発掘調査	11
2 整理作業	11
第2節 基本層序	13
第3節 検出遺構と遺物	17
1 概要	17
2 古代の遺構と遺構内出土遺物	17
(1) 壑穴状遺構	17
(2) 溝跡	17
3 中世の遺構と遺構内出土遺物	18
(1) 井戸跡	18
(2) カマド状遺構	20
(3) 溝跡	21
(4) 土坑	22
(5) 柱穴様ピット	23
4 近世の遺構と遺構内出土遺物	24
5 時期不明の遺構	24
(1) 土坑	24
(2) 柱穴様ピット	27
6 遺構外出土遺物	27
第4章 理化学的分析	52
第5章 総括	57
報告書抄録	
図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡周辺の地形区分及び地形分類図	4
第3図 峰吉川中村遺跡と周辺遺跡位置図	6
第4図 調査区と周辺地形図	12
第5図 基本層序図	14
第6図 西側調査区遺構配置図	15
第7図 東側調査区遺構配置図	16
第8図 S E 33井戸跡、S K I 52堅穴状遺構、S D 48溝跡、S K P 54柱穴様ピット	28
第9図 S E 57・S E 101井戸跡	29
第10図 S E 106・S E 114井戸跡	30
第11図 S E 10井戸跡、S K 14・S K 30土坑	31
第12図 S O 5・S O 12カマド状遺構	32
第13図 S O 26カマド状遺構、S D 122溝跡	33
第14図 S K 4・S K 27土坑、S K P 6・S K P 8柱穴様ピット	34
第15図 S K 109・S K 111・S K 113土坑	35
第16図 S K 123・S K 124土坑、S K P 125・S K P 126・S K P 136・S K P 140柱穴様ピット	36
第17図 S K 11・S K 13・S K 22・S K 29・S K 107土坑	37
第18図 S K 115・S K 117・S K 118・S K 132土坑	38
第19図 柱穴様ピット（1）	39
第20図 柱穴様ピット（2）	40
第21図 柱穴様ピット（3）	41
第22図 遺構内出土遺物（1）	43
第23図 遺構内出土遺物（2）	44
第24図 遺構内出土遺物（3）	45
第25図 遺構外出土遺物（1）	46
第26図 遺構外出土遺物（2）	47
第27図 遺構外出土遺物（3）	48
第28図 遺構外出土遺物（4）	49
第29図 曆年較正年代グラフ（参考）	56
第30図 遺構変遷及び須恵器系陶器出土量分布図	61

表 目 次

第1表 峰吉川中村遺跡周辺の遺跡一覧表（1）	9
第2表 峰吉川中村遺跡周辺の遺跡一覧表（2）	10
第3表 柱穴様ピット一覧表	42

第4表 出土土器・陶磁器観察表（遺構内）	50
第5表 出土土器・陶磁器観察表（遺構外）	51
第6表 出土木製品観察表	51
第7表 出土石製品観察表	51
第8表 出土鉄関連遺物観察表	51
第9表 測定試料及び処理一覧表	53
第10表 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果一覧表	54

図 版 目 次

- 図版1 遺跡全景
- 図版2 遺跡遠景
- 図版3 調査区全景・西側調査区完掘状況
- 図版4 東側調査区完掘状況・基本層序
- 図版5 基本層序・SK I 52・SD 48・SE 10
- 図版6 SE 33・57・101・106
- 図版7 SE 114・SO 5
- 図版8 SO 5・SO 12・SO 26・S 122
- 図版9 遺構内出土遺物（1）
- 図版10 遺構内出土遺物（2）
- 図版11 遺構内出土遺物（3）
- 図版12 遺構内出土遺物（4）
- 図版13 遺構外出土遺物（1）
- 図版14 遺構外出土遺物（2）
- 図版15 遺構外出土遺物（3）
- 図版16 遺構外出土遺物（4）

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

国土交通省による雄物川上流河川改修事業は、雄物川沿川地域において、昭和19年7月洪水及び戦後最大の昭和22年7月洪水等、昭和以降に発生した代表的洪水と同規模外水氾濫による床上浸水等重大な被害を防止するとともに、水田等農地についても被害の軽減に努めることを目的として、平成25年度に開始された。平成29年度には中流部で洪水による甚大な被害が発生したことを受け、堤防整備や河道掘削が強力に進められている。中村芦沢地区では令和4年度を目標に堤防整備を進め、洪水による家屋浸水被害の解消を目指している。

堤防整備予定地内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるため、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所(以下、湯沢河川国道事務所)から、秋田県教育委員会に埋蔵文化財の分布状況についての調査依頼があった(平成24年5月14日付、国東整湯一工第5号)。秋田県教育委員会は、平成24年7月から8月にかけて、中村芦沢地区堤防整備予定地内の試掘調査を実施して、新たに峰吉川中村遺跡を発見し(平成24年9月24日付、教生一1420)、その旨を湯沢河川国道事務所に通知した。その後、湯沢河川国道事務所と秋田県教育委員会による協議を経て、平成26年度には用地買収が進んだ工事区域内8,390m²を対象として、秋田県埋蔵文化財センターが本発掘調査を実施した。

平成30年4月、用地未取得のため未調査であった旧墓地及び旧水田について、湯沢河川国道事務所から調査依頼があった(平成30年4月10日付、国東湯一工第1号)。それを受け生涯学習課文化財保護室が平成30年11月2日に改めて試掘調査を実施し、対象範囲全城の本発掘調査が必要であることを報告した(平成31年3月28日付、教生一1999)。なお、この試掘調査によって当初本発掘調査が不要と判断していた旧墓地南東側の低地についても調査が必要となり、工事区域内の要本発掘調査面積は9,193m²となった。令和2年度に、未調査範囲として残っていた803m²を対象に埋蔵文化財センターが本発掘調査を行い、工事区域内全ての埋蔵文化財対応が完了した。

第2節 調査の経過

調査は令和2年9月1日から10月30日まで、調査員2人のもと、発掘調査作業員22人の体制で実施した。なお、本発掘調査に先立ち、湯沢河川国道事務所の協力のもと、バックホウによる表土除去を8月19日～24日までの期間で行った。調査区の東側は現代までの墓地跡であり、表土除去中に骨壺や骨片が出土した。協和交番の現場検証を経て事件性が無いことを確認した。本発掘調査の経過は次のとおりである。

【第1週】9月1日(火)～9月3日(木)

発掘調査開始。東側調査区でSE101井戸跡、SD122溝跡を検出。

【第2週】9月8日(火)～9月11日(金)

西側調査区でSO5カマド状遺構、柱穴様ピットを検出。東側でSE106井戸跡を検出し、精査を開始する。

【第3週】9月14日(月)～9月17日(木)

西側調査区で精査しているカマド状遺構の残存状況が良いことを確認。東側調査区では、井戸跡、土坑を検出し、精査を進める。

【第4週】9月23日(水)～9月25日(金)

西側調査区では新たにSO12カマド状遺構を検出した。東側調査区で精査を進めている井戸跡から青磁片や須恵器系陶器が出土し、中世の遺構群であることが判明した。

【第5週】9月28日(月)～10月2日(金)

現代墓地の撤去に伴う搅乱土の下から井戸跡と思われる木製の枠を検出し、精査を行ったが、ビニールやゴム等の現代遺物が出土したことから、現代墓に伴う地下施設であると判断した。

【第6週】10月5日(月)～10月9日(金)

西側調査区では新たにSE33井戸跡、柱穴様ピットを検出した。

【第7週】10月12日(月)～10月16日(金)

西側調査区では新たにSKI52竪穴状遺構、SO51カマド状遺構等を検出し精査を行った。東側調査区で精査しているSE106井戸跡から箸が出土した。

【第8週】10月19日(月)～10月23日(金)

SO51カマド状遺構は精査の結果、焼土が二次堆積したものと判断。隣接するSO5カマド状遺構やSO12カマド状遺構由来と考えられる。20日空撮を行う。22日横手市教育委員会文化財保護課佐藤課長、島田課長代理來跡。

【第9週】10月26日(月)～10月30日(金)

遺構精査を完了させ、全景の完撮写真を撮影する。機材を整理し現場を撤収する。30日湯沢河川国道事務所金谷工務係長、県教育庁生涯学習課文化財保護室安田文化財主事が来跡し引き渡し協議を行う。現場の管理と出土した骨壺等を引き渡した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、発掘調査中の令和2年11月から令和4年3月まで実施した。遺物洗浄と注記作業、遺物の集計・計量・分類、土器等の接合・復元作業及び実測を令和3年1月まで行った。その後デジタルトレースや挿図版組、編集作業を令和4年2月までの期間で行った。

遺構図面関係については令和2年11月から翌年4月まで遺構第2原図の作成を行い、デジタルトレースを行った。トレース完了図については、令和3年4月から令和4年1月までの期間に編集作業を行った。令和4年1月から3月までは、収藏のためのデータ作成、整理を行った。

参考文献

秋田県教育委員会『峰吉川中村遺跡－雄物川上流河川改修事業(中村芦沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』

秋田県文化財調査報告書第505集 2016(平成28)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第515集 2019(平成31)年

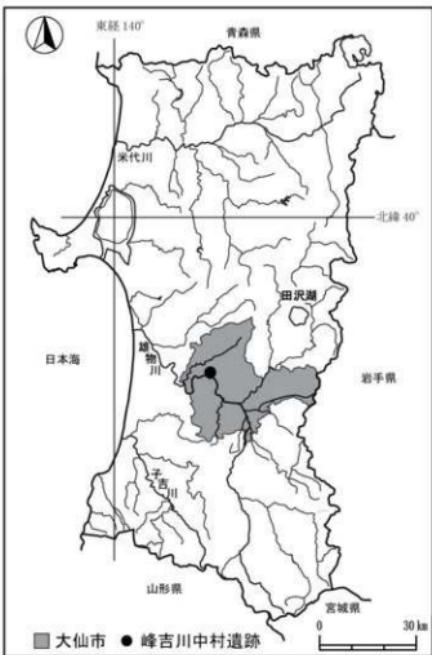
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

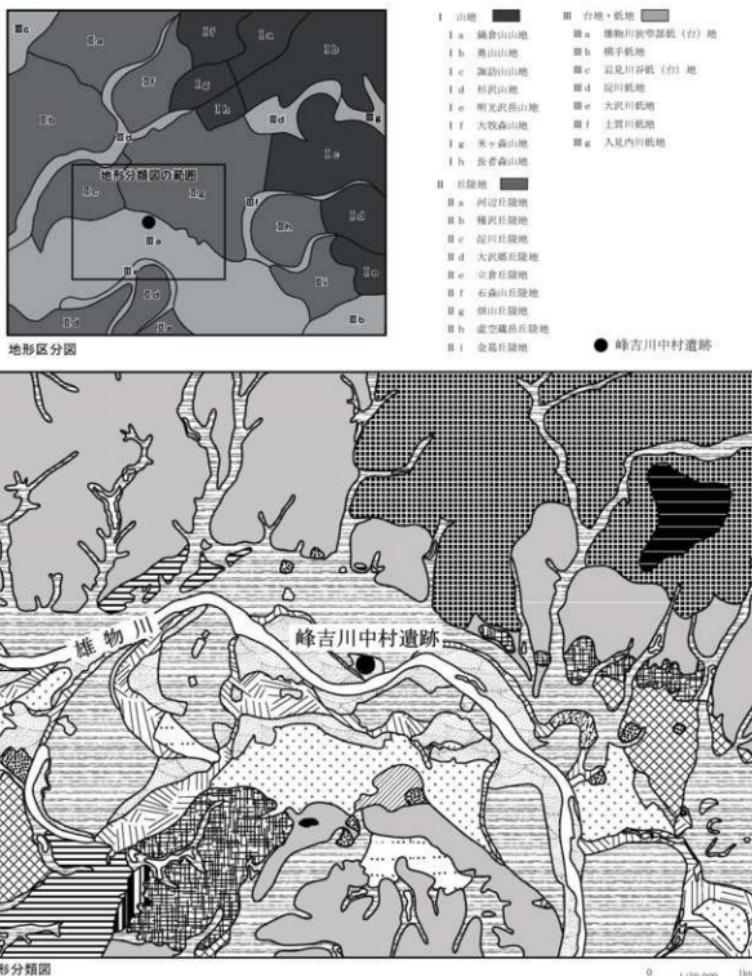
峰吉川中村遺跡が所在する大仙市は、秋田県南部の中央に位置する(第1図)。東は岩手県和賀郡西和賀町と、西は秋田市・由利本荘市、南は横手市・美郷町、北は仙北市に接している。古くから県南の交通の要衝であり、現在でも秋田新幹線や秋田自動車道等が市内を縦断している。

本遺跡はJR奥羽本線峰吉川駅から南東1.7kmの、北緯39度33分26秒、東経140度20分25秒の雄物川右岸、標高約16~18mの自然堤防上に立地する(第2図)。遺跡の南0.2kmには雄物川が西流し、出羽山地を横断して秋田平野から日本海に注ぐ。また周辺地形は、山地、丘陵地、台地(段丘地)、低地によって構成され、北から東に大牧山地(I f)、鍋倉山地(I a)、奥山山地(I b)、米ヶ森山地(I g)、長者森山地(I h)、諏訪山山地(I c)があり、それらの山地に隣接して北から西へ、河辺丘陵地(II a)、種沢丘陵地(II b)、石森山丘陵地(II d)、畠山丘陵地(II g)、淀川丘陵地(II c)が、南では大沢郷丘陵地(II d)、立倉丘陵地(II e)が形成されている。遺跡周辺の雄物川の流域一帯では、雄物川狭窄部低地(III a)が広がり、その周辺には横手低地(III b)、淀川低地(III d)、大沢川低地(III e)、土買川低地(III f)が位置する(第3図上)。特に遺跡の近辺は、旧河道が入り組み、雄物川の氾濫平野を特徴付ける。河川の勾配もいたって小さく雄物川の下流部にも似た緩やかな水流を呈し、自然堤防が発達する(第2図下)。

遺跡周囲の表層地質は、本遺跡を含めた雄物川沿岸部に高位から低位の段丘堆積物が分布する。その周囲の丘陵地においては、第三紀上位の女川層が畠山丘陵地などに分布する。女川層は、硬質頁岩、硬質シルト岩、暗灰色泥岩から構成される。その上位の船川層が同じく畠山丘陵地などに分布する。本層には泥岩、シルト岩、ディサイトなどを含む。その上位の天徳寺層は、河辺丘陵地、大沢郷丘陵地、立倉丘陵地、石森山丘陵地、畠山丘陵地などに広く分布する。シルト岩、細粒砂岩などから構成される。椎岡層は、種沢丘陵地などに分布し、中粒砂岩、シルト岩などから成る。遺跡周辺の雄物川の河床礫は、主としてこれらの丘陵地周辺の表層地層に由来するものであろう。



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形区分及び地形分類図（註1文献をもとに作成）

第2節 歴史的環境

峰吉川中村遺跡(第3図1、以下番号のみ)は大仙市協和地区に位置する。『秋田県遺跡地図(仙北地区版)⁽²¹⁾⁽²²⁾』に基づいて作成した同遺跡を中心とする雄物川中流域の周辺遺跡位置図(第3図)には、68か所の遺跡を数えることができる。これらの遺跡は、沖積地周辺の丘陵や雄物川及びその支流沿いでの河岸段丘等比較的小高い位置に集中している。以下、峰吉川中村遺跡の周辺遺跡について旧石器時代から近世までを概観する。⁽²³⁾⁽²⁴⁾

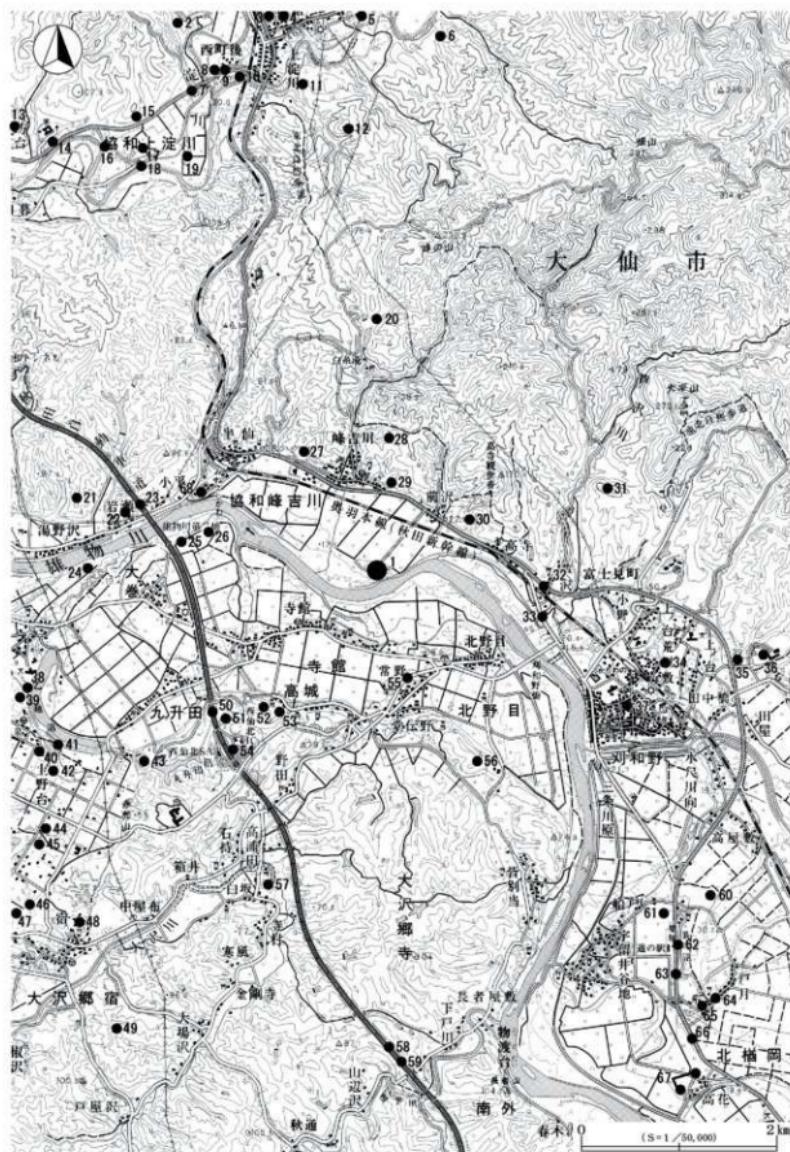
雄物川中流域及び、その支流である淀川周辺では、古くから人間の活動した痕跡が残る。旧石器時代の遺跡は、岸館遺跡(4)・坊台遺跡(13)・柏台遺跡(51)・上野台遺跡(54)等がある。いずれも石刀、ナイフ形石器等が少量採集されているに止まり、遺跡の詳細な性格は不明である。現状では上記4遺跡中3遺跡が淀川～荒川沿いの段丘上に立地する。さらに荒川流域では、岸館遺跡の上流3.5kmの右岸段丘上に複数時期にまたがる石器集中域が伴う米ヶ森遺跡が立地している。⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾小形の台形石器は、米ヶ森型台形石器と命名され標識遺物となっている。

縄文時代の遺跡は、草創期から晩期まで確認されている。本遺跡の北東へ9kmの上ノ山II遺跡では、草創期と推定される有舌尖頭器5点が出土している。前期を中心とする遺物と混在して出土しており、遺跡の具体的な様相は不明である。縄文時代早期では、半仙遺跡(23)、上野台遺跡がある。両遺跡とも早期末の土器が出土している。雄物川右岸高位段丘上に立地する上野台遺跡では、この他に該期の土坑1基も検出されている。また、雄物川左岸冲積低地の自然堤防上に立地する大川端道ノ上遺跡(24)ではトランシェ様石器が1点出土している。当該石器は早期まで遡る時期のものと推定される。

縄文時代前期になると遺跡数が増加する。発掘調査された遺跡には、五百刈田遺跡(14)、館野遺跡、上ノ山I遺跡、上ノ山II遺跡、半仙遺跡、寺沢遺跡(50)、常野遺跡(55)等がある。このうち、五百刈田遺跡、寺沢遺跡では主に前期前半の土器が出土し、淀川右岸低位段丘上に立地する前者では当該期の可能性ある堅穴建物跡1棟、雄物川右岸高位段丘上に立地する後者では同じく土坑7基がそれぞれ確認されている。また、館野遺跡、上ノ山II遺跡、上ノ山I遺跡、半仙遺跡では、前期後半の堅穴建物跡が確認されている。中でも上ノ山II遺跡では、中央の広場の周囲に大小の堅穴建物跡が巡る大規模な集落が出現している。さらに隣接する上ノ山I遺跡、館野遺跡にも同時期の堅穴建物跡が確認されている。このほか、雄物川左岸低位段丘上に立地する常野遺跡では、縄文時代前期に属すると推定される狩猟用の陥り穴が6基見つかっている。

縄文時代中期では、岸館遺跡、西町後遺跡(10)、五百刈田遺跡、館野遺跡、上ノ山I遺跡、寄騎館遺跡(32)、大川端道ノ上遺跡、柏台遺跡、上野台遺跡等がある。現状では中期前半の遺跡は顕著ではなく、中期後半の遺跡が目立つ。このうち、淀川左岸中位段丘上に立地する館野遺跡・上ノ山I遺跡、雄物川右岸側の丘陵根部上に立地する寄騎館遺跡、上野台遺跡では中期後半の堅穴建物跡が確認されている。前期の上ノ山II遺跡のような大規模集落は認められないが、中期後半には一定規模の集落が再度形成されるとみられる。

縄文時代後期では、上述の大川端道ノ上遺跡のほか、柏台遺跡、上野台遺跡等がある。このうち上野台遺跡では、後期前葉の堅穴建物跡が1棟確認されているほか、地点を異にして同時期の掘立柱建物跡も分布



第3図 峰吉川中村遺跡と周辺遺跡位置図

する。当該時期では、複数住居が集合して集落を形成するのではなく、単独の住居が分散して立地していた可能性も想定される。また、大川端道ノ上遺跡では住居は確認されず、主として後期前半には貯蔵穴が、後期後半から晩期にかけては土坑墓がそれぞれ累計で10数基前後営まれたと考えられる。

繩文時代晩期では、西町後遺跡、寄騎館遺跡、大川端道ノ上遺跡、常野遺跡等がある。寄騎館遺跡では、10mほど離れた南北2地点で、小判形平面の土坑墓が合わせて20基近く確認されている。また、大川端道ノ上遺跡では、晩期初頭まで下る直径0.9m前後の円形平面で一度に埋め戻されたと想定される小形土坑が確認されている。

弥生時代では、和田遺跡(15)、中沢遺跡(28)、大川端道ノ上遺跡、上野台遺跡、上野台X遺跡、上野台VI遺跡(44)等がある。上野台遺跡では中期の土坑1基が確認されているが、遺構及び遺跡の詳細な性格は不明である。また、大川端道ノ上遺跡では破片ではあるものの、比較的大形の中期の甕などが出土している。弥生時代後期には、淀川右岸中位段丘上に立地する和田遺跡で、住居の可能性がある焼土遺構と柱穴群に加えて土製軋錘車が出土している。この他、後期には、中沢遺跡などのように丘陵部に立地する例がある。

古墳時代もしくは続縄文文化の遺跡は、峰吉川中村遺跡周辺では現在のところ未確認である。

古代になると、寺沢遺跡、上野台遺跡で平安時代の遺構、遺物が確認される。このうち、周辺冲積地とは比較40m前後の雄物川左岸高位段丘上に立地する寺沢遺跡では、堅穴建物跡2棟が確認されている。住居は同時に併存していた可能性が高く、遺跡は短期間営まれた小規模集落であったと想定される。

中世では、唐松城跡(2)、唐松林館跡(8)、大館城跡(12)、湯ノ沢城跡(21)、馬館跡(27)、根岸館跡(29)、館ノ沢城跡(30)、寄騎館跡(33)等の館跡が丘陵部を中心に点在して分布する。いずれも詳細な時期や構造などは不明であるが、多くは戦国時代前後の造営と推測されている。また、寄騎館跡に隣接する寄騎館遺跡では、中世の火葬施設及び火葬骨を埋納した火葬墓などが確認されている。これらの遺構も詳細な時期は不明であり、寄騎館跡と関係するかは判然としない。雄物川沿岸の沖積低地では、左岸の大川端道ノ上遺跡で2棟の掘立柱建物と井戸などからなる鎌倉時代の屋敷跡が確認され、周辺低地での水田開発及び雄物川水運と関連する可能性が推測される。同遺跡は短期間の居住に限定されるとみられ、おそらく雄物川の氾濫により短期間で放棄されたようである。右岸の沖積低地の微高地部では、北檜岡中島遺跡(60)、船戸遺跡(63)、北檜岡中野遺跡(66)、茨野遺跡(67)、小平沢出口遺跡(68)等でカマド状遺構が確認されており、中世の活発な土地利用が認められる。

近世の代表的な遺跡には、雄物川左岸段丘に部分的に遺存する亀田街道跡(46)と御番所跡(48)がある。本遺跡のある峰吉川中村地区は、近世を通じ一貫して秋田藩に属している。

その後、峰吉川地域は、明治22(1889)年の町村制の施行に伴い、新刈和野村となる。明治33(1900)年に新刈和野村の一部が分割されて、峰吉川村が起立。昭和30(1955)年に協和村の一部となり、昭和44(1969)年に協和町、そして平成17(2005)年の平成の大合併で、大仙市の一部となり今に至る。本遺跡のある中村集落は、平成5(1993)年、築堤工事により移転するまで存続していた。

註1 秋田県『土地分類基本調査 刈和野』 1980(昭和55)年

註2 土谷信之・吉川敏之『刈和野地域の地質』通商産業省工業技術院地質調査所 1994(平成6)年

註3 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(仙北地区版)』2007(平成19)年

註4 以下の文章は、秋田県教育委員会『西坂戸・岸遺跡』秋田県文化財調査報告書第502集 2016(平成28)年を参照した。

註5 協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』 1971(昭和46)年

協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』 1977(昭和52)年

参考文献

- 秋田県教育委員会『西板戸遺跡－雄物川上流河川改修事業(西板戸地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－・南遺跡－雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II－』秋田県文化財調査報告書第502集 2016(平成28)年
- 協和町史編纂委員会編『協和町史 上巻』2001(平成13)年
- 西仙北町郷土史編纂委員会編『西仙北町史 先史～近世編』1997(平成9)年
- 秋田県公文書館『秋田県公文書館 絵図図録』2016(平成26)年

第1・2表 文献(表中の番号は文献番号に対応する)

- 1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(仙北地区版)』2007(平成19)年
- 2 秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室ホームページ『秋田県遺跡地図情報』
- 3 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第96集 1981(昭和56)年
- 4 長山幹丸『協和町の城と館－郷土学習資料－』1980(昭和55)年
- 5 協和村郷土史編纂委員会編『協和村郷土誌』1968(昭和43)年
- 6 西仙北町郷土史編纂委員会編『西仙北町史 先史～近世編』1997(平成7)年
- 7 秋田県教育委員会『五百刈田遺跡発掘調査報告書－県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第194集 1990(平成2)年
- 8 秋田県教育委員会『和田遺跡発掘調査報告書－県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第212集 1991(平成3)年
- 9 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III－上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡－』秋田県文化財調査報告書第180集 1989(平成元)年
- 10 秋田県教育委員会『寄駒館遺跡－一般国道13号刈和野バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第277集 1998(平成10)年
- 11 西仙北町郷土史編纂委員会編『西仙北町郷土誌』1976(昭和51)年
- 12 内田武志・宮本常一編『月の出羽路』『普江直澄第7巻』未来社 1978(昭和53)年
- 13 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第140集 1986(昭和61)年
- 14 秋田県『秋田県考古古編』1960(昭和35)年
- 15 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地名表(新産都市指定地域内埋蔵文化財包蔵地一覧)』秋田県文化財調査報告書第9集 1967(昭和42)年
- 16 秋田県教育委員会『常野遺跡－主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第368集 2004(平成16)年
- 17 神岡町教育委員会『神岡町遺跡等所在一覧』1984(昭和59)年
- 18 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年
- 19 秋田県庁文書『領中大小・道程』1681(天和元)年
- 20 増田町菅生・石川博吉氏蔵 神岡町教育委員会『神岡町遺跡跡・伝説・神社仏閣等所在地一覧』1984(昭和59)年
- 21 神岡町教育委員会『神岡町遺跡跡等所在地一覧』1984(昭和59)年
- 22 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年
- 23 神岡町教育委員会『茨野遺跡－下夕野地区県営扱い手育成基盤事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』神岡町文化財調査報告書 2004(平成16)年
- 24 秋田県教育委員会『北巣間中野遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV－』秋田県文化財調査報告書第482集 2012(平成24)年

番号	遺跡名(番号)	遺跡名	主な時代	遺構・遺物	文献
56	212-46-37	船ノ塙	中世	主郭・帯郭・堀状剥り込み	1・2・3
57	212-46-39	白坂館	中世	主郭・帯郭・陶磁器	1・2・3・6・11
58	212-46-49	川田堤名Ⅱ		石路	1・2
59	212-46-48	川田堤名Ⅰ	漢文	溝土路・石礎(崩期)	1・2
60	212-45-28	北側岡守塙	中世・近世	聖穴立石跡・土坑・カマド状遺構・土上遺構・柱穴様ピット・陶磁器	2
61	212-45-1	二木村経屋		縄石	1・2・17・18
62	212-45-2	二木村一里塙	近世	一里塙2基	1・2・19・20
63	212-45-27	船戸	平安・中世	聖穴立石跡物跡・柱穴跡・井戸跡・カマド状遺構・土上遺構・火葬施設・遺跡・柱穴様ピット・土器器・陶磁器・木製品・石製品・瓦質	2・25
64	215-45-1	北側岡守塙			1・2・21
65	212-45-3	北側寺跡	中世	土器・空瓶・井戸跡(崩没)	1・2・20
66	212-45-26	北側岡中野	漢文・平安・中世・近世	聖穴立石跡物跡・聖穴立石跡・カマド状遺構・土上遺構・井戸跡・遺跡・柱穴様ピット・溝土路・石器・水牛生土器・土器器・須恵器・東晉器系陶器・瓦質陶磁器	2・24
67	212-45-20	芦野	漢文・中世・近世	聖穴立石跡・聖穴立石跡・聖穴立石跡物跡・井戸跡・溝外郭・露跡・從土遺構・土坑・土器器・須恵器・瓦質陶器・柱穴様ピット・土器器・須恵器・瓦質陶器・柱穴様ピット・土器器・須恵器・瓦質陶器・柱穴様ピット・土器器・須恵器・瓦質陶器・柱穴様ピット・土器器・須恵器・瓦質陶器・柱穴様ピット・土器器・須恵器・瓦質陶器・柱穴様ピット・土器器・須恵器・瓦質陶器	1・2・23
68	212-01-111	小平沢田口	漢文・中世	カマド状遺構・柱穴様ピット・溝土路・石器・須恵器・陶器	2・29・30

※遺跡名番号:212-□△△21212大船市、□△△うち△は100番間隔、6012は西脇北町、5112は日高町を表す。△は遺跡番号。

- 25 秋田県教育委員会『船戸遺跡—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V-』
秋田県文化財調査報告書第490集 2011(平成23)年
- 26 秋田県教育委員会『大川端道上遺跡—雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I-』
秋田県文化財調査報告書第496集 2015(平成27)年
- 27 秋田県教育委員会『西板戸遺跡—雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I-・舟遺跡—雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II-』
秋田県文化財調査報告書第502集 2016(平成28)年
- 28 秋田県教育委員会『峰吉川中村遺跡—雄物川上流河川改修事業(中村芦沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I-』
秋田県文化財調査報告書第505集 2016(平成28)年
- 29 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布報告書』秋田県文化財調査報告書第520集 2021(令和3)年
- 30 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布報告書』秋田県文化財調査報告書第525集 2022(令和4)年

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

今回の発掘調査の範囲は、事業用地のうち平成26年度の発掘調査の際に用地未買収地であった部分であり、大きく2か所に分かれる。(第4図)。これら2つの調査区を便宜上西側調査区と東側調査区に分けて調査を行った。

表土除去作業は、埋蔵文化財センター職員立ち会いのもと重機を使用して行った。調査区内の掘り下げは、表土及び造成土(Ⅰ層)までを重機で行い、東側調査区北側に一部残存する中世の遺物包含層(Ⅱ層)から人力で掘り下げた。西側調査区ではⅢ層及びⅣ層上面で遺構確認を行い、検出した遺構について精査を行った。

調査は、グリッド法で行った。調査対象のほぼ全域に方眼杭を打設するため、平成26年度調査で設定した原点(世界測地系平面直角座標第X系 X=-49016.000, Y=-42356.000)を基軸にし、4m×4mのメッシュを組み、その交点に方眼杭を打設した。方眼の原点を通る南北線をMA、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向かって昇順となるよう、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう付した。この方眼による4m四方の区画は、南東隅にあたる杭の南北と東西の符号を組み合わせ、MA50のように呼ぶことにした(第6・7図)。

遺構は、柱穴様ピットも含めて検出順に南北線NDラインよりも西側では1番、東側では100番からの通し番号を付し、遺構の略記号と組み合わせて呼称した。また中には、精査の結果により、遺構でないと判断した欠番としたものもある。実測図は原則として1/20の縮尺で作図した。

遺物は、出土区もしくは出土遺構、出土層位、出土年月日を記録して取り上げを行った。遺物の収納、取り扱いについては、土器・陶磁器・石製品等はチャック付ボリ袋に入れ、コンテナに収納した。木製の遺物については、コンテナに水漬けして収納した。

写真撮影は、遺構調査の随所で行ったほか、必要に応じて遺物の出土状況等を記録した。撮影は、フルサイズの撮像素子を有するデジタル一眼レフカメラを行った。

2 整理作業

遺構の図面は、現場で作成した原図から第2原図を作成し、スキャニングしたものを下図としてドローイングソフトを用いてデジタルトレースを行った。遺物は、洗浄、注記の後、土器・陶磁器類については、必要に応じて接合作業を行った。その後報告書に掲載する遺物を選別し、土器は拓本・実測図を作成した。遺物の図面もスキャニングしてドローイングソフトを用いてデジタルトレースし作成した。

遺構の写真は、現場で撮影したRAWデータからTIFデータを現像した。遺物の写真は、実測・拓本作業終了後に、フルサイズの撮像素子を有するデジタル一眼レフカメラにて撮影した。撮影したRAWデータからTIFデータを現像し、画像編集ソフトを用いて切り抜きを行った。



第4図 調査区と周辺地形図

遺構・遺物のデジタルトレース図及び写真画像は、最終的にドローイングソフトを用いてレイアウトし、挿図・図版原稿を作成した。

第2節 基本層序

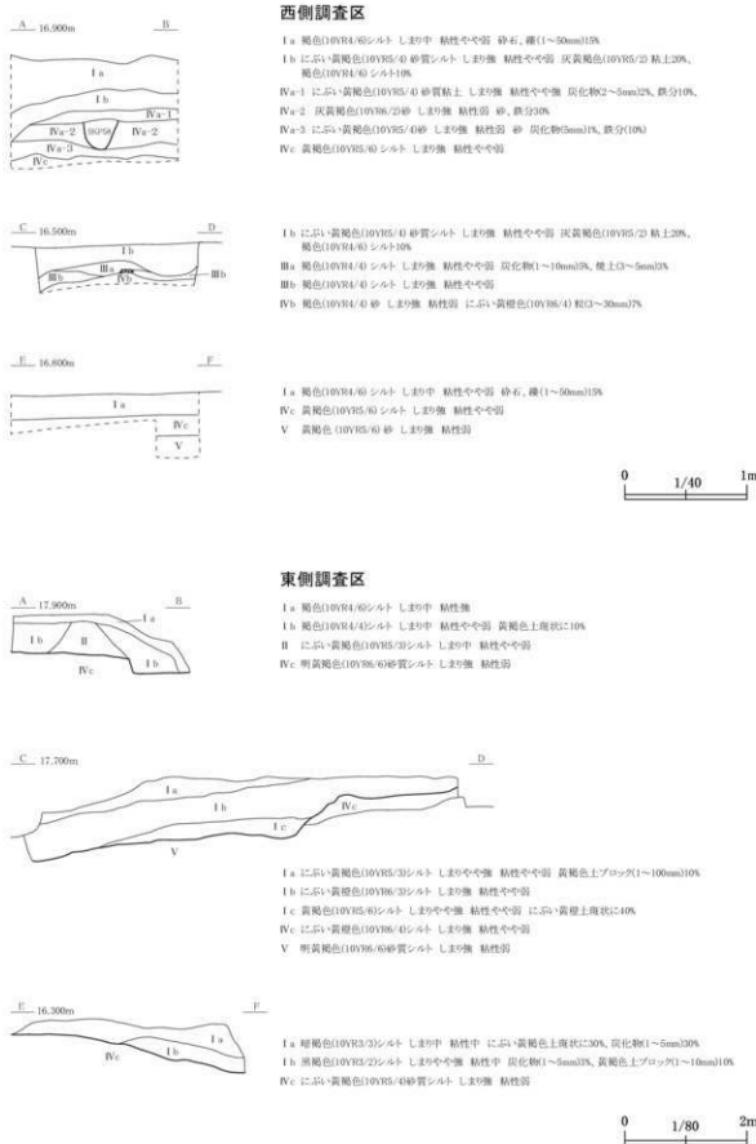
遺跡の基本層序は、西側調査区では調査区北壁及びサブレンチ壁で、東側調査区では地形の傾斜に沿って設置した土層ベルトでそれぞれ観察した。調査区全体では大別して5層に分層した。I層は近現代の表土、耕作土、造成土である。II層以下が河川由来の自然堆積土であり、II・IIIa・IIIb・IVa層は遺物を包含する。II層は自然堤防上に位置する東側調査区にのみ分布し、古代から中世・近世を経て現代まで利用されている面である。造墓による擾乱が激しく、東側調査区でも北側一部にしか残存していない。III層・IV層は自然堤防末端部の標高がやや低い西側調査区にのみ分布する。これらに含まれる遺物は原位置ではなく自然堤防上や周囲から流入したものと考えられる。両調査区の堆積土と各層の詳細は次のとおりである。

西側調査区

- 第Ia層：暗褐色(10YR3／3)シルト しまり中 粘性やや弱 耕作土
- 第Ib層：にぶい黄褐色(10YR5／4)砂質シルト しまり強 粘性やや弱 造成土
- 第IIIa層：褐色(10YR4／4)シルト しまり強 粘性やや弱 炭化物5%、焼土3%含む
- 第IIIb層：褐色(10YR4／4)シルト しまり強 粘性やや弱
- 第IVa-1層：にぶい黄褐色(10YR5／4)砂質粘土 しまり強 粘性やや強
炭化物2%、酸化鉄10%含む
- 第IVa-2層：灰黄褐色(10YR6／2)砂 しまり強 粘性弱 酸化鉄30%含む
- 第IVa-3層：にぶい黄褐色(10YR5／4)砂 しまり強 粘性弱
炭化物1%、酸化鉄10%含む
- 第IVb層：褐色(10YR4／4)砂 しまり強 粘性弱 にぶい黄褐色土を粒状に7%含む
- 第IVc層：黄褐色(10YR5／6)シルト しまり強 粘性やや弱
- 第V層：黄褐色(10YR5／6)砂 しまり強 粘性弱

東側調査区

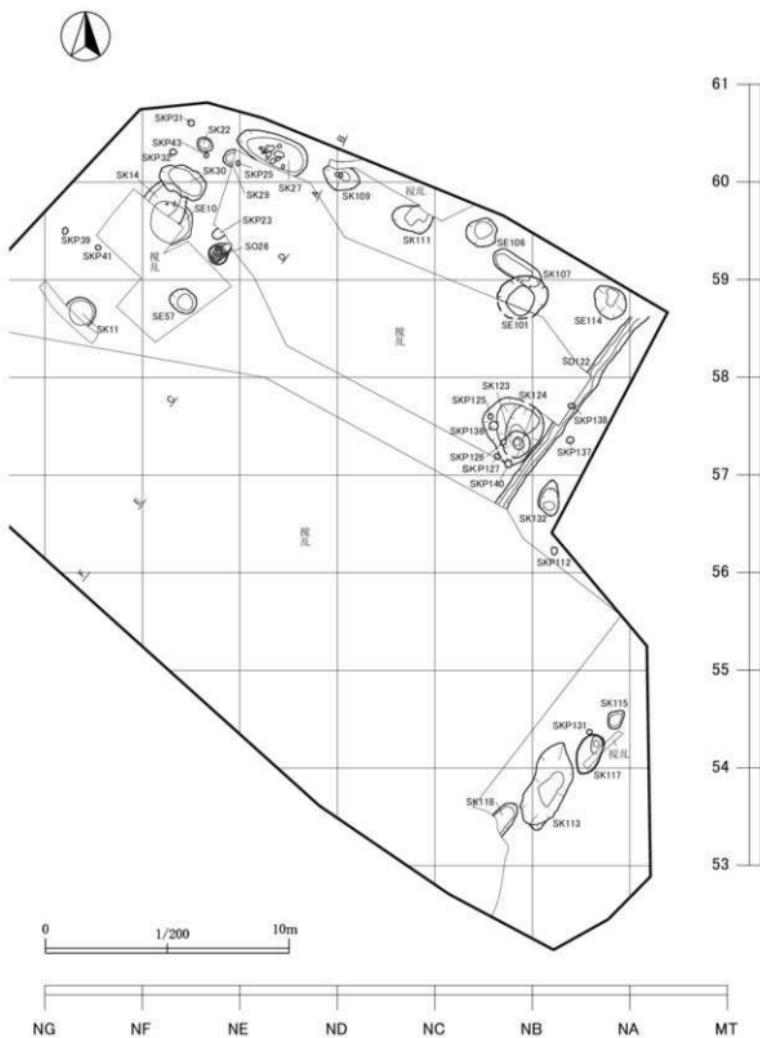
- 第Ia層：褐色(10YR4／6)シルト しまり中 粘性強 表土
- 第Ib層：にぶい黄褐色(10YR5／3)シルト しまりやや弱 粘性やや弱 造成土
- 第Ic層：黄褐色(10YR5／6)シルト しまりやや強 粘性やや弱 造成土
- 第II層：にぶい黄褐色(10YR5／3)シルト しまり中 粘性やや弱 黄褐色土を斑状に10%含む
- 第IVc層：黄褐色(10YR5／6)シルト しまり強 粘性やや弱
- 第V層：明黄褐色(10YR6／6)砂質シルト しまり強 粘性弱



第5図 基本層序図



第6図 西側調査区遺構配置図



第7図 東側調査区遺構配置図

第3節 検出遺構と遺物

1 概要

調査区内で検出した遺構は、竪穴状遺構1基、井戸跡6基、カマド状遺構3基、溝跡2条、土坑19基、柱穴様ピット45基である。

出土した出土遺物は、縄文土器4点145.3g、須恵器4点374.2g、土師器54点203.5g、中国磁器5点26.9g、須恵器系陶器81点6,904.1g、瓷器系陶器4点145.6g、近世陶磁器13点665.9g、木製品11点、鍛冶関連遺物3点である。これらの内、大きさや残存状態、表面の摩減具合をもとに選別し、須恵器4点、土師器2点、中国磁器5点、須恵器系陶器56点、瓷器系陶器3点、近世陶磁器7点、木製品(箸)7点、石製品(茶臼)1点、鉄関連遺物3点を掲載した。出土遺物の詳細については、遺物観察表(第4~8表)に記載した。なお、須恵器系陶器については、吉岡康暢の珠洲編年に依り、鉢類は仰し目を有する所謂播鉢を含め片口鉢として分類している。また、秋田県大仙市に所在する大畑窯跡、大畑・桧山腰窯跡、斐沢窯跡等の須恵器系陶器の窯跡を総称して南外窯跡群とし、ここで生産された陶器を南外産と称する。

2 古代の遺構と遺構内出土遺物

(1) 竪穴状遺構

SKI52竪穴状遺構(第8図、図版5)

位 置: 西側調査区NM64・65グリッドに位置する。

規 模: 搾乱により全体の形状が不明であるが隅丸方形を呈していたと思われる。残存する最大幅は2.23m。検出面からの深さ0.29m。

確認状況: IVb層中で炭化物を含む褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構: SKP7・8・55、SE33に切られる。SD48を切る。北東部が擾乱を受ける。

堆 積 土: 2層に分層した。1層はIIIa層由来のにぶい黄褐色土を基質とする。混合物を含むため、人為的な埋土と考えられる。2層は周辺の土より粘性が強く、貼床の可能性がある。

出土遺物: 2層直上から須恵器(第22図1)が出土。

所 見: 形態と貼床の存在から竪穴建物跡になる可能性があるが、伴う柱穴が確認できないため、竪穴状遺構とした。須恵器が出土しており、平安時代に帰属すると思われる。

(2) 溝跡

SD48溝跡(第8図、図版5)

位 置: 西側調査区NL63・64、NM63・64グリッドに位置する。

規 模: 南北に延びる溝跡で、南側は現代の水路の擾乱を受ける。残存する長さ2.99m、幅0.64m、確認面からの深さ0.24m。底面は鍋底状で壁は急に立ち上がる。

確認状況: IVb層中で炭化物を含む褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構: SKI52、SKP54に切られる。

堆 積 土: 2層に分層した。1・2層ともIVb層由来の褐色土を基質とする。水が當時流れていた形跡は認められない。混合物を含むことから人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物: 須恵器(第22図1)と土師器小片1点が出土した。須恵器はSKI52出土の須恵器と接合した。

所 見：遺構内堆積土では水が流れた形跡が確認できることから、区画のために構築された可能性がある。SK152と重複し、本遺構が古いことから、平安時代のものと思われる。

3 中世の遺構と遺構内出土遺物

(1) 井戸跡

SE10井戸跡(第11図、図版5)

位 置：東側調査区NE59グリッドに位置する。

規 模：搅乱、SK14に切られているため、平面形は不明である。確認面からの深さ1.41m。底面形は楕円形でやや凹凸している。長さ1.75m、幅1.59m、検出面からの深さ1.41m。壁は東側が急に立ち上がり、西側はオーバーハングしながら中位で内傾後、急に立ち上がる。

確認状況：IVc層中にぶい黄褐色、暗褐色、明黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構：SK14に切られる。

堆 積 土：14層に分層した。1・2層はII層由来のにぶい黄褐色・暗褐色土。3～14層はIIIa層由来の褐色、にぶい黄褐色・明褐色・グライト化した暗灰黄色・灰黄褐色土を基質とする。12層はオーバーハング部の崩落土でそれ以外は全て混合物を含むことから、廃絶時の人为的な埋土と考えられる。

出土遺物：青磁片(第22図2)が出土。

所 見：出土遺物から中世の井戸跡である。堆積土の状況や井戸枠材等の出土もないことから、素掘りの井戸跡と考えられる。放射性炭素年代測定の結果から1220～1269calAD(2σ)の年代値が得られている。湧水深度である砂質シルト層まで掘り込まれていないため、井戸として使用されていない可能性がある。

SE33井戸跡(第8図、図版6)

位 置：西側調査区NM・NL64グリッドに位置する。

規 模：平面形は楕円形で主軸方向はN-55°-Wである。残存長1.38m、検出面からの深さは0.77m。底面はやや平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

確認状況：IVc層中にぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構：SK152を切る。北東部は搅乱を受ける。

堆 積 土：10層に分層した。1・3・5層はIVa層由来のにぶい黄褐色・灰黄褐色土を、2・6・7はIVb層由来のにぶい黄褐色・褐色土を、4・8・9・10はIIIa・IIIb層由来の暗褐色・にぶい黄褐色・グライト化した灰黄褐色土を基質とする。堆積土が基本土層と整合しない順に堆積しており、人为的に埋め戻していると考えられる。

出土遺物：須恵器系陶器1点(第22図3)出土。

所 見：時期は出土遺物から中世と考えられる。堆積状況や井戸枠材等の出土もないことから素掘りの井戸跡と考えられる。放射性炭素年代測定の結果から1037～1198calAD(2σ)の年代値が得られている。湧水深度である粘土層まで掘り込まれていないため、未完成の井戸の可能性がある。

SE57井戸跡(第9図、図版6)

位 置：東側調査区NE58グリッドに位置する。

規 模：平面形は楕円形で主軸方向はN-54°-Wである。長さ1.10m、幅0.93m。検出面からの深さ1.58m。

壁は急に立ち上がる。底面形は平坦で円形を呈し、長さ0.64m、幅0.60m。

確認状況：搅乱坑下部のIVc層中より、円形のにぶい黄褐色・暗褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構：搅乱によって上部が削平されている。

堆積土：8層に分層した。1～7層はII層由来の黒褐色・暗褐色・にぶい黄褐色。8層は木片を多く含むため、木材等が土壤化して形成されたと思われる。いずれも混合物を含むことから人為的埋め戻し土と考えられる。

出土遺物：土師器小片1点が出土。

所見：堆積状況や井戸枠等の出土もないことから素掘りの井戸跡と考えられるが、8層に木片を多く含むため、何らかの材を入れていた可能性もある。土師器小片が出土しているが、放射性炭素年代測定の結果から、1223～1274calAD(2σ)の年代値が得られており、中世に属する遺構と考えられる。

SE101井戸跡(第9図、図版6)

位置：東側調査区NA58・59、NB58・59グリッドに位置する。

規模：南側が搅乱を受けており、平面形は推定であるが梢円形。主軸方向はN-51°-E。残存部分の長さ2.0m、推定幅1.75m、検出面からの深さ2.05m。底面は平坦で梢円形を呈する。長さ1.24m、幅1.05m。

確認状況：IVc層中で灰黄褐色・黄褐色・灰黄色・暗灰黄色土の広がりとして確認した。近現代の墓による削平、搅乱を受けている。

重複遺構：SK107を切る。

堆積土：14層に分層した。1～10・14層に他質の土が斑状に含まれることから人為的に埋め戻されていると考えられる。5層の上面に炭化物層が形成される。

出土遺物：1層から須恵器系陶器2点(第22図4・5)、14層から箸(第22図7)が出土した。

所見：出土遺物から中世の井戸跡と判断できる。木枠等は確認できないことから素掘りであったと考えられる。埋め戻す途中に炭化物層が薄く形成しており、廃絶に関わる何らかの行為が行われた可能性がある。

SE106井戸跡(第10図、図版6)

位置：東側調査区NB59グリッドに位置する。

規模：平面形は梢円形で主軸方向はN-56°-W。長さ1.28m、幅1.19m。検出面からの深さは2.03m。底面は平坦で梢円形を呈する。長さ0.75m、幅0.68m。

確認状況：IVc層中で灰黄褐色・黄褐色・暗灰黄色・黃灰色土の広がりとして確認した。北東側を近現代の墓による搅乱を受ける。

重複遺構：なし。

堆積土：10層に分層した。焼土や炭化物、他質の土が斑状に含まれることから人為的に埋め戻されていると考えられる。3層下位に炭化物層が薄く形成される。

出土遺物：1層から須恵器系陶器(第22図6)、土師器小片、8層から箸が6点(第22図8～13)出土した。

所見：出土遺物から中世の井戸跡と判断できる。木枠等は確認できないことから素掘りであったと考えられる。3層及び10層から採取した試料の放射性炭素年代測定の結果では、1168～1263calAD(2σ)、1168～1265calAD(2σ)の年代値が得られており、時間差なく埋め戻されたと考えられる。4層上面

に炭化物層が薄く堆積しており、埋め戻す途中に窪みで廃絶等何らかの行為が行われた可能性がある。

SE114井戸跡(第10図、図版7)

位 置: 東側調査区NA58グリッドに位置する。

規 模: 平面形は楕円で主軸方向はN-29°-Eである。長さ1.48m、幅1.21m。検出面からの深さ1.62m。底面の平面形は不整形で平坦である。

確認状況: IVc層中でにぶい黄褐色・灰黄褐色・黄褐色土の広がりとして確認した。上部及び北部は擾乱を受ける。

重複遺構: なし。

堆積 土: 18層に分層した。炭化物や他質土を斑状に含むことから人為的に埋め戻されていると考えられる。

8層は炭化物を含む黒色土が薄く堆積した層である。

出土遺物: 須恵器系陶器が(第22図14・15)出土。

所 見: 出土遺物から中世の井戸跡と判断できる。木枠等は確認できないことから素掘りであったと考えられる。炭化物層が薄く堆積しており(8層)、埋め戻す途中に窪みで廃絶等何らかの行為が行われた可能性がある。

(2) カマド状遺構

SO5カマド状遺構(第12図、図版7・8)

位 置: 西側調査区NN64・65、NM65グリッドに位置する。

規 模: 平面形は楕円形の燃焼部に円形の煙道部と焚き口部が付き、焚き口部の前面に楕円形の前庭部が広がる。主軸方向N-53.8°-Eである。煙道から前庭部までは長さ2.8m、幅0.85m、確認面からの深さは0.61mである。擾乱により上部を僅かに削平されている。

確認状況: IVa層中で焼土、にぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構: 前庭部がSK46に切られる。

堆積 土: 12層に分層した。1層～7層は焼土粒・塊・炭化物粒・塊が斑状ではなく、均一に混入する洪土堆積層である。IVa・IVb層と土色、土質が類似している。8層は炭化物層でグライ化している。9・10層は貼床で、9層がグライ化している。11・12層は焼土層で被熱度合いで分けた。①・②とした土層は①がIVa層、②がIVb層に類似した堆積土であり、自然堆積土と捉えているが、①層に炭化物が含まれることから、遺構掘り方内に堆積した土である可能性もある。

出土遺物: なし。

所 見: 一部崩落しているものの天井部の残存状態は良好である。焚き口から煙道までが真っ直ぐ並ぶタブレットである。掘り込んで掘り抜いたか、土を積み上げたものか構築方法は不明であるが、白色粘土は確認されていない。出土遺物がないため時期は不明であるが、放射性炭素年代測定の結果、1325～1424calAD(2σ)の年代値が得られていることから、中世の遺構としている。遺構周辺で検出したSKP6・18・19・49・59柱穴様ピットは、本遺構に伴う上屋等の可能性があるが、遺構内堆積土の質に共通性は認められず、柱間距離も一定ではないことから掘立柱建物にしていない。

SO12カマド状遺構(第12図、図版8)

位 置: 西側調査区NN64・65グリッドに位置する。

規 模:前部南西が搅乱を受けており、全長は不明。主軸方向はN-46.4°-Eであり残存長1.89m、検出面からの深さ0.44m。底面形は瓢箪形を呈していたと思われる。

確認状況:IVb層中で焼土及びにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土:12層に分層した。1~6層は混合物が認められるが、斑状ではなくやや均一に含まれるため、洪水平積層と考えられる。IVa・IVb層と土色、土質が類似している。7・8層は廃絶に伴う人為的な埋め戻し土である。9層はグライ化した炭化物層で10層は粘性の強い貼床。11層は煙送部の被熱赤化面、12層は天井崩落土である。

出土遺物:なし。

所 見:南側の大半が搅乱により失われていたため、構築方法は不明である。煙道部に礫が埋められていることから廃絶に伴う儀礼を行ったと推定される。詳細な時期は不明であるが、遺構の形状や周辺の遺構との関係から中世の遺構として捉えている。なお、放射性炭素年代測定の結果は390~208calBC(2σ)の年代値が得られているが、IV層に含まれる炭化物が混入したものと考えられる。

SO26カマド状遺構(第13図、図版8)

位 置:東側調査区NE59グリッドに位置する。

規 模:平面形は円形の燃焼部に梢円形の煙道部が付く、だるま形を呈する。煙道部の一部が搅乱によつて切られる。主軸方向はN-51.7°-E。残存長:1.10m、幅0.80m。底面は平坦で壁は急に立ち上がり、煙道部の傾斜は緩やかである。

確認状況:IVc層中で焼土及びにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土:7層に分層した。1~4層はそれぞれ炭化物、焼土ブロック等を含むため廃絶時の人為的な埋め戻し土と考えられる。5・6層は天井崩落土で、7層は機能時に形成された炭化物層である。

出土遺物:なし。

所 見:天井部が崩落し、上部が削平されているため、構築時の構造は不明である。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、放射性炭素年代測定によれば1224~1275calAD(2σ)の年代値が得られていることから、中世の遺構としている。

(3)溝跡

SD122溝跡(第13図、図版8)

位 置:東側調査区MT58、NA57・58、NB56・57グリッドに位置する。

規 模:主軸方向はN-38°-Wであり、底面は北東から南西に向かって傾斜している。残存長9.50m、幅0.45m、検出面からの深さは0.22~0.28m。

確認状況:IVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。南西側を近現代の墓に圍むる造成により搅乱されている。

重複遺構:なし。

堆 積 土:II層由来の単層である。水が流れた痕跡は認められない。

出土遺物:須恵器系陶器(第23図18・19)が出土した。

所 見:出土遺物から中世の溝跡である。堆積土からは水流の痕跡が認められず、性格は不明である。

(4) 土坑

SK4土坑(第14図)

位 置:西側調査区NM65グリッドに位置する。

規 模:平面形は楕円形で主軸方向はN-69°-Eである。長さ1.00m、幅0.79m、検出面からの深さ0.26m。

断面形は半楕円形、壁はやや緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦。

確認状況:IVb層中で褐色土の広がりとして確認した。

重複構造:SKP6に切られる。

堆 積 土:3層に分層した。1層は人為的な埋め戻し土、2層はIIIa層が堆積した際の水成堆積。3層は自然堆積土である。

出土遺物:1層中より須恵器系陶器(第22図16)が出土した。

SK14土坑(第11図)

位 置:東側調査区NE59グリッドに位置する。

規 模:搅乱とSK30によって大半が失われているため、平面形は不明である。残存長は2.23mで、検出面からの深さは0.41mである。

確認状況:IVc層中で暗褐色土の広がりとして確認し、また搅乱坑断面でも確認した。

重複構造:SE10を切り、SK30に切られる。

堆 積 土:2層に分層した。炭化物や黄褐色土ブロックを含むことから人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物:須恵器系陶器(第22図17)、土師器小片が出土。

所 見:出土遺物から中世の土坑であるが、性格は不明である。

SK27土坑(第14図)

位 置:東側調査区ND60グリッドに位置する。

規 模:平面形は楕円形で主軸方向はN-65°-Wである。長さ3.01m、幅は搅乱を受けており不明であるが残存長で1.32m。底面は比較的平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

確認状況:IVc層中にぶい黄褐色土の広がりと疊集中を確認し、精査により土坑と判断した。

重複構造:なし。

堆 積 土:単層である。黄褐色土ブロック・炭化物等が混入していることから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物:青磁片(第23図20)、須恵器系陶器(第23図21・22)、石製品茶臼(第23図23)、鉄関連遺物(図版1187)が出土した。

所 見:時期は出土遺物から中世と考えられる。性格は不明である。

SK30土坑(第11図)

位 置:東側調査区NE59・60グリッドに位置する。

規 模:平面形は不整楕円形。主軸方向はN-60°-W。長さ2.49m、幅1.37m、検出面からの深さは0.31mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

確認状況:IVc層中にぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複構造:SK14を切る。

堆 積 土:4層に分層した。1~3層はIIIa層由来のにぶい黄褐色土であり、混合物を含むため人為的埋土と

考えられる。4層はSK14由来の暗褐色土を基質とし、SK14からの流入土と思われる。

出土遺物：須恵器（第23図24）、土師器（第23図25）、須恵器系陶器（第23図26）が出土した。

所 見：出土遺物から中世の土坑と考えられるが、性格は不明である。

SK109土坑（第15図）

位 置：東側調査区NC59・60、ND59・60グリッドに位置する。

規 模：平面形は梢円形で北側が搅乱を受ける。主軸方向はN-20°-Wであり、長さ1.56m、残存幅0.99m、検出面からの深さ0.59m。

確認状況：IVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複構造：なし。

堆 積 土：2層に分層した。黄褐色土ブロックが混入しており、人為的に埋め戻されていると考えられる。

出土遺物：1層から須恵器系陶器（第23図27）、2層から鉄滓（図版1186）が出土した。

所 見：出土遺物から中世の土坑と考えられる。底面から自然縛が出土したが、性格は不明である。

SK111土坑（第15図）

位 置：東側調査区NC59グリッドに位置する。

規 模：平面形は梢円形で北東側が搅乱を受ける。主軸方向はN-88°-Wであり、長さ1.68m、幅1.14m、検出面からの深さ0.15m。

確認状況：IVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複構造：なし。北東に搅乱を受ける。

堆 積 土：単層である。上部が削平されており、詳細は不明である。

出土遺物：1層から須恵器系陶器（第23図28～31）が出土した。

所 見：出土遺物から中世の遺構と考えられるが、性格は不明である。

SK124土坑（第16図）

位 置：東側調査区NA57、NB57グリッドに位置する。

規 模：平面形は不整な梢円形で主軸方向はN-8°-Eである。長さ2.74m、幅2.4m、検出面からの深さは0.85m。

確認状況：上部を削平されたIVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複構造：SK123、SKP125、SKP126、SKP136、SKP140に切られる。

堆 積 土：4層に分層した。黄褐色土が斑状に混入することから人為的な埋め戻しと考えられる。

出土遺物：1層から須恵器系陶器（第24図32）が出土した。

所 見：出土遺物から中世の大型土坑と考えられるが、性格は不明である。

（5）柱穴様ピット

SKP40柱穴様ピット（第20図）

位 置：西側調査区NL64グリッドに位置する。

規 模：平面形は円形で直径約0.60m、検出面からの深さは0.38m。

確認状況：IVc層中で褐色土の広がりとして確認した。

重複構造：なし。

堆 積 土：2層に分層した。炭化物や焼土、黄褐色土ブロックが混入していることから人為的な埋め戻し土と

考えられる。

出土遺物:須恵器系陶器(第24図33)が出土した。

所 見:出土遺物から中世の遺構であるが、性格は不明である。

SKP55柱穴様ピット(第21図)

位 置:西側調査区NM64グリッドに位置する。

規 模:平面形は円形で直径約0.40m、検出面からの深さは0.22m。

確認状況:IVb層中でSKI52を検出した際に、SKI52内に褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:SKI52を切る。

堆 積 土:2層に分層した。炭化物や焼土、黄褐色土ブロックが混入していることから人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物:須恵器系陶器小片が出土した。

所 見:出土遺物から中世の遺構であるが、性格は不明である。

4 近世の遺構と遺構内出土遺物

SK113土坑(第15図)

位 置:東側調査区NA53・54、NB53グリッドに位置する。

規 模:平面形は不整な楕円形で主軸方向はN-18°-Eである。長さ3.73m、幅1.54m、検出面からの深さ0.96m。底面は狭く、壁の傾斜は緩い。

確認状況:IVc層中にぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土:2層に分層した。他質の土が混入することから人為的に埋め戻されていると考えられる。

出土遺物:1層から須恵器系陶器(第24図34・35)、近世陶器(第24図36・37)が出土した。

所 見:出土遺物に近世があることから、江戸時代の大型土坑と考えられるが、性格は不明である。

SK123土坑(第16図)

位 置:東側調査区NB57グリッドに位置する。

規 模:平面形は円形で直径1.25m前後、検出面からの深さ0.90m。

確認状況:搅乱坑底面のIVc層中、SK124検出時にSK124内でぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:SK124を切る。SKP126に切られる。

堆 積 土:3層に分層した。黄褐色土ブロックが混入することから人為的に埋め戻されていると考えられる。

出土遺物:1層から須恵器系陶器(第24図38)、2層から青磁(第24図39)、土師器小片、近世陶磁器小片が出土。

所 見:出土遺物に近世があることから、江戸時代の遺構と考えられるが性格は不明である。

5 時期不明の遺構

(1) 土坑

SK11土坑(第17図)

位 置:東側調査区NF58グリッドに位置する。

規 模: 平面形は円形であるが、南西側が搅乱を受けている。残存する部分から直径1.24m、確認面からの深さは0.26m。底面は比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

確認状況: IVc層中で暗褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土: 2層に分層した。1層は黄褐色土ブロックや炭化物の混入から人為堆積と思われる。2層はIVc層由来土を多く含むため、壁の崩落土と思われる。

出土遺物:なし。

所 見: 性格は不明である。

SK13土坑(第17図)

位 置: 西側調査区NN65・66グリッドに位置する。

規 模: 平面形は梢円形であり、主軸方向はN-18°-E。長さ0.63m、幅0.58m、検出面からの深さは0.10m。底面は比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

確認状況: IVa層中で暗褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土: 単層である。水成堆積土。

出土遺物:なし。

所 見: 性格は不明である。

SK22土坑(第17図)

位 置: 東側調査区NE60グリッドに位置する。

規 模: 平面形は梢円形であり、主軸方向はN-56°-Wである。長さ0.68m、幅0.57m、検出面からの深さは0.16m。底面は湾曲し、壁は緩やかに立ち上がる。

確認状況: IVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土: 単層である。混合物を含むため、人為的に埋め戻していると考えられる。

出土遺物:なし。

所 見: 性格は不明である。

SK29土坑(第17図)

位 置: 東側調査区NE60グリッドに位置する。

規 模: 東側が搅乱を受けており、平面形は不明。残存部の幅0.72m、検出面からの深さ0.23m。底面はやや平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

確認状況: IVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土: 単層である。黄褐色土ブロックが斑状に混入していることから人為的に埋め戻したと考えられる。

出土遺物:なし。

所 見: 性格は不明である。

SK46土坑(第12図)

位 置: 西側調査区NN64・65グリッドに位置する。

規 模: 平面形は不整梢円形で主軸方向はN-59°-Wである。長さ1.34m、幅0.99m検出面からの深さは0.22m。底面はやや凹凸がある。立ち上がりはやや急である。

確認状況: IVb層内で褐色土の広がりとして確認した。

重複構造: SO5, SO12を切る。

堆 積 土: 2層に分層した。1・2層とともにIIIb層由来の褐色土を基質とする。1層は混合物を含むため、人為的埋土と考えられる。2層はSO12煙道由来の焼土を含む。自然流入土である。

出土遺物: 土器小片1点が出土した。

所 見: 性格は不明。重複関係からSO5よりは新しい。SO12の煙道由来の焼土が、2層までしか広がっていなかったため、SO5の前庭部が埋まつた後、掘り込まれたものと判断し、区別した。

SK107土坑(第17図)

位 置: 東側調査区NA58・59, NB58・59グリッドに位置する。

規 模: 平面形は梢円形で主軸方向はN-58°-Wである。長さ2.23m、幅0.85m、検出面からの深さは0.34mであり、底面は平坦である。

確認状況: IVc層中にぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複構造: SE101に切られる。

堆 積 土: 2層に分層した。2層はIIIa層主体にぶい黄褐色土が斑状に混入することから人為的に埋め戻していると考えられる。

出土遺物: なし。

所 見: SE101よりも古いことから中世以前の土坑であるが詳細な時期、性格ともに不明である。

SK115土坑(第18図)

位 置: 東側調査区NA54グリッドに位置する。

規 模: 平面形は不整な梢円形で軸方向はN-39°-Eである。長さ0.88m、幅0.64m、検出面からの深さ0.14m。

確認状況: IVc層中にぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複構造: なし。北東に搅乱を受ける。

堆 積 土: 単層である。上部が削平されており、詳細は不明である。

出土遺物: なし。

所 見: 性格は不明である。

SK117土坑(第18図)

位 置: 東側調査区NA53・54グリッドに位置する。

規 模: 平面形は梢円形で東から南にかけて細く搅乱を受ける。軸方向はN-29°-Eであり、長さ1.23m、幅0.98m、検出面からの深さ0.31m。

確認状況: IVc層中にぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複構造: なし。

堆 積 土: 単層である。上部が削平されており、詳細は不明である。

出土遺物: なし。

所 見: 性格は不明である。

SK118土坑(第18図)

位 置: 東側調査区NB53グリッドに位置する。

規 模: 平面形は楕円形で南西側が擾乱を受ける。軸方向はN-42°-Eであり、残存長1.20m、幅0.84m、検出面からの深さ0.75m。

確認状況: IVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土: 3層に分層した。他質の土や砂利が混入することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。

出土遺物:なし。

所 見: 性格は不明である。

SK132土坑(第18図)

位 置: 東側調査区NA56グリッドに位置する。

規 模: 平面形は不整な楕円形で主軸方向はN-3°-Eである。長さ1.48m、幅0.83m、検出面からの深さ0.27m。

確認状況: IVc層中でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

重複遺構:なし。

堆 積 土: 2層に分層した。黄褐色土や炭化物が混入することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。

出土遺物:なし。

所 見: 性格は不明である。

(2)柱穴様ピット(第19~21図)

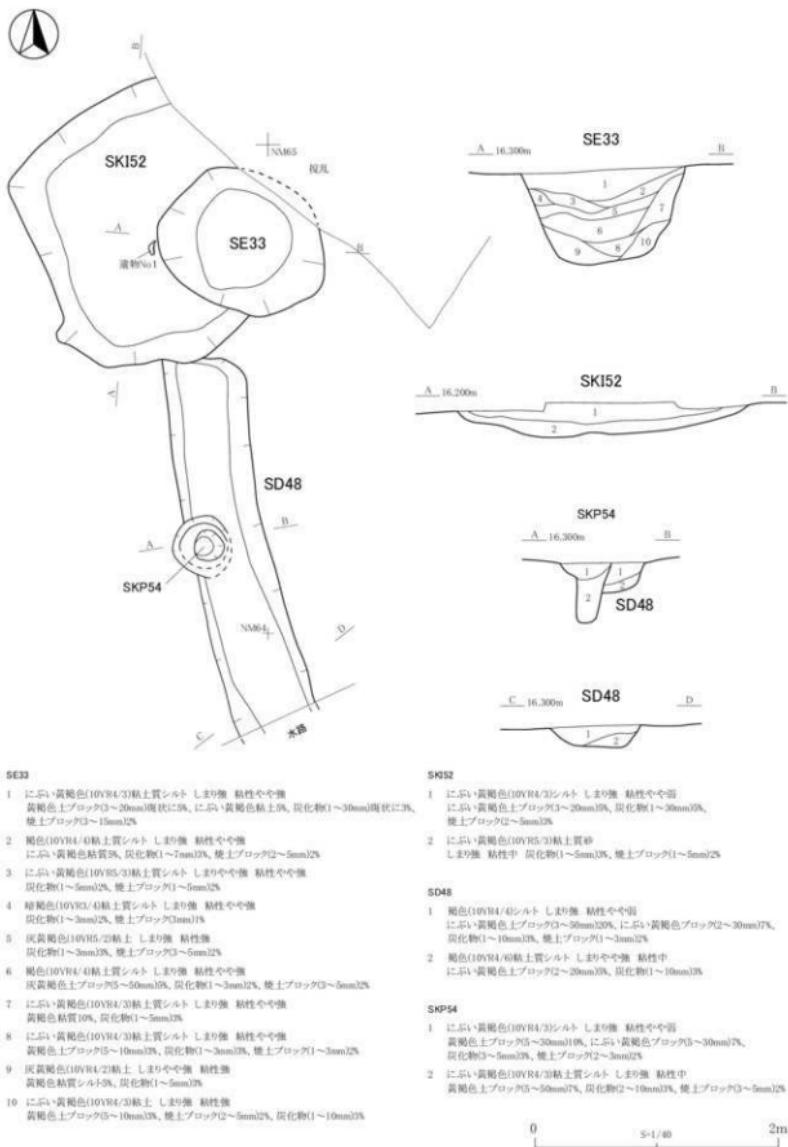
柱穴様ピットを西側調査区で29基、東側調査区で16基検出している。SKP40、SKP55以外は出土遺物がなく、帰属する時期は不明である。各遺構の詳細は第3表に掲載する。

6 遺構外出土遺物

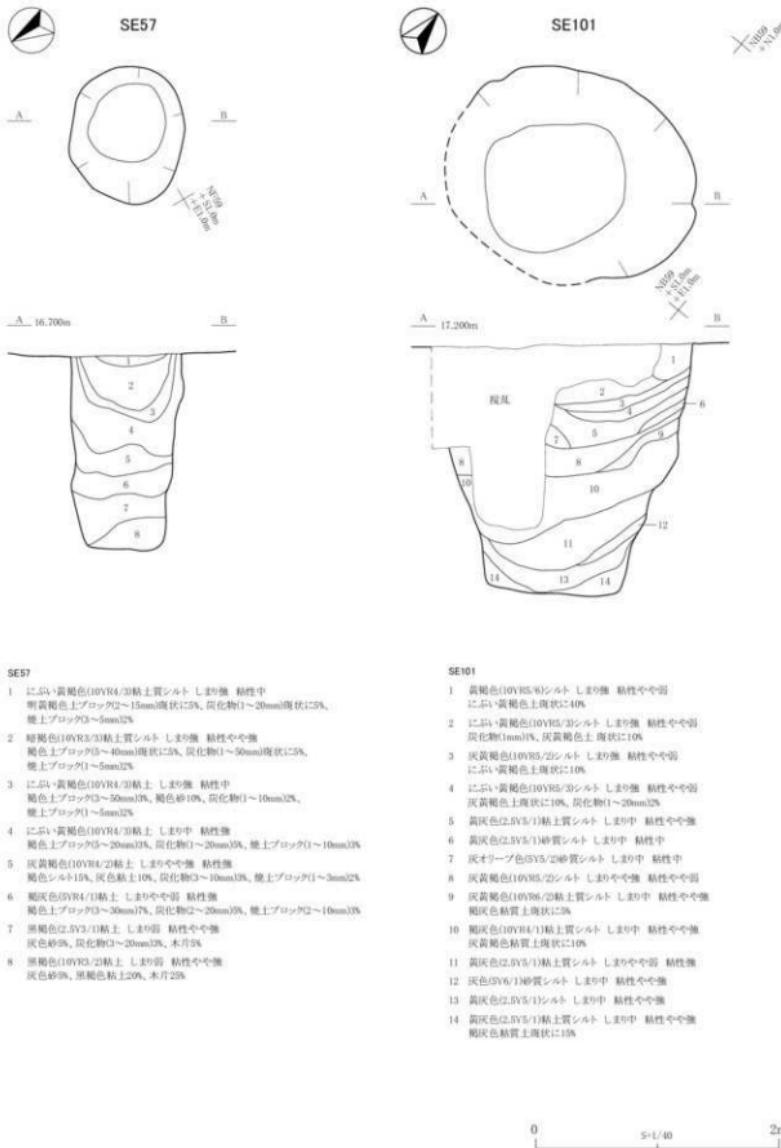
遺構外からの出土遺物は、大部分が造成土や擾乱土の中からの出土であり層位的な検討は不可能である。それら出土遺物のうち図示できない小片を除いて、土師器1点、須恵器3点、青磁2点、須恵器系陶器32点、瓷器系陶器3点、近世陶磁器5点、鉄関連遺物1点を掲載した。各遺物の法量等は第5・8表に記載する。

参考文献

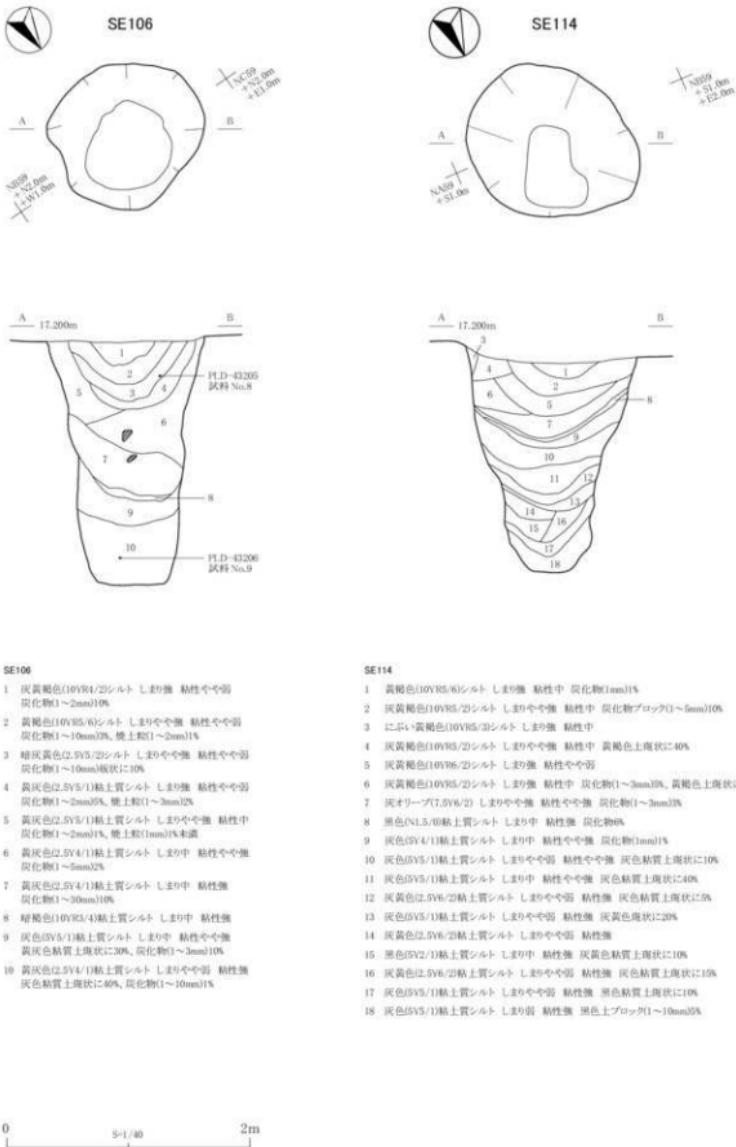
吉岡康暢 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館 1994(平成6)年



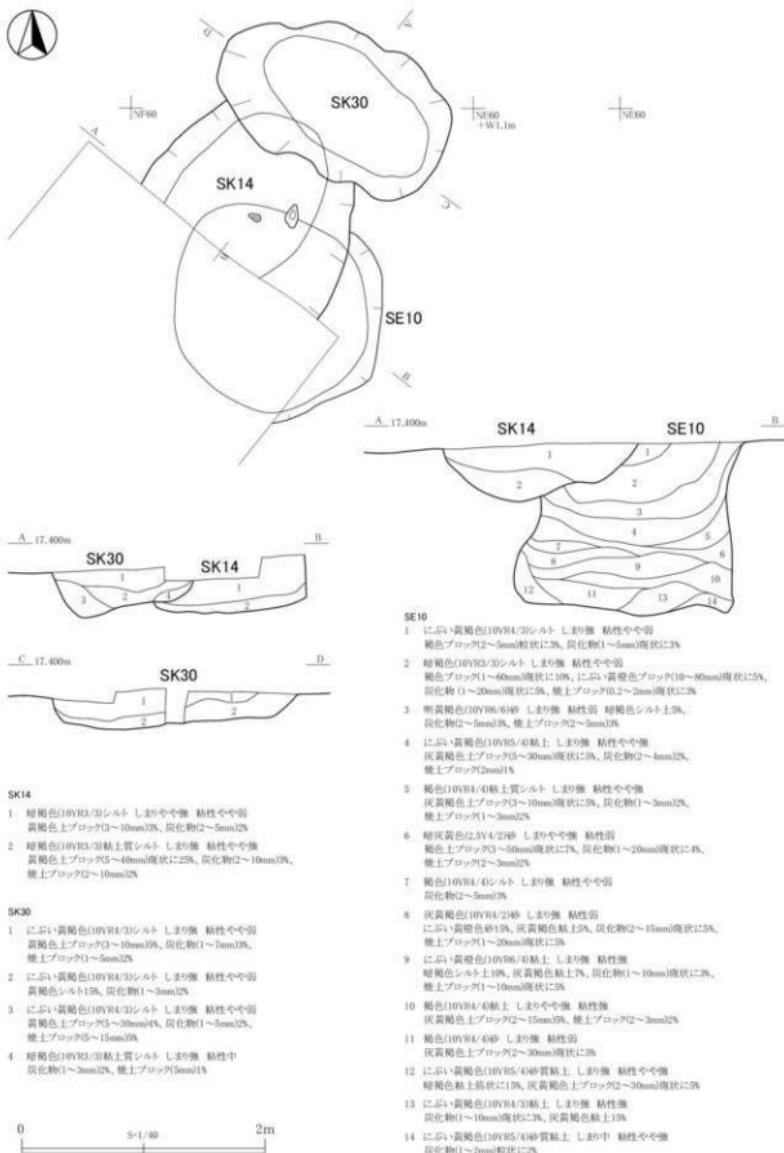
第8図 SE33井戸跡、SKI52縦穴状遺構、SD48溝跡、SKP54柱穴様ピット



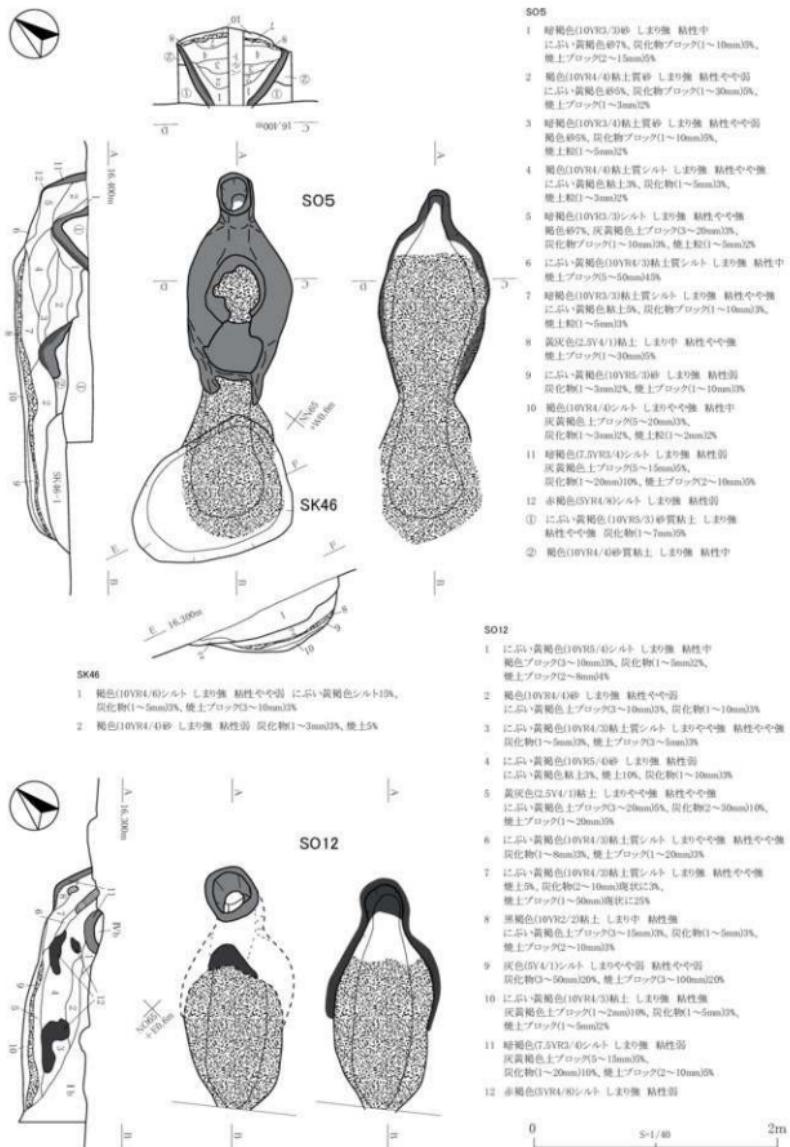
第9図 SE57・SE101井戸跡



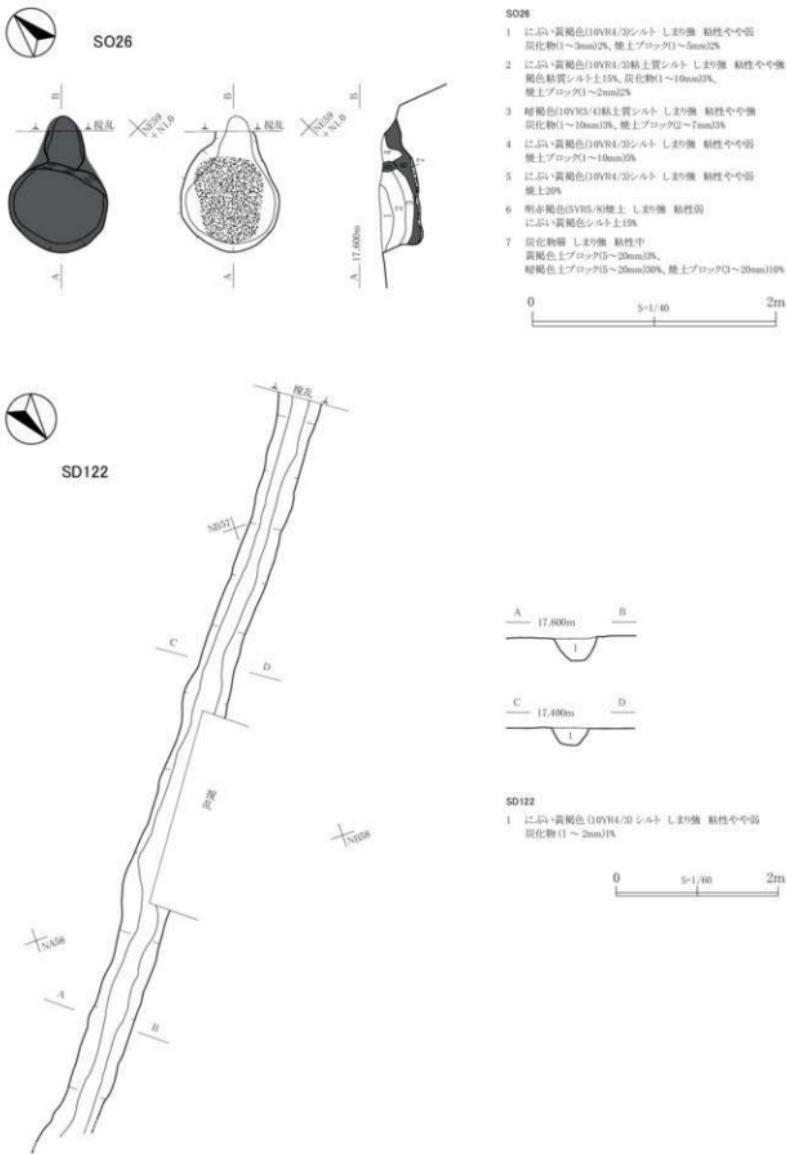
第10図 SE106・SE114井戸跡



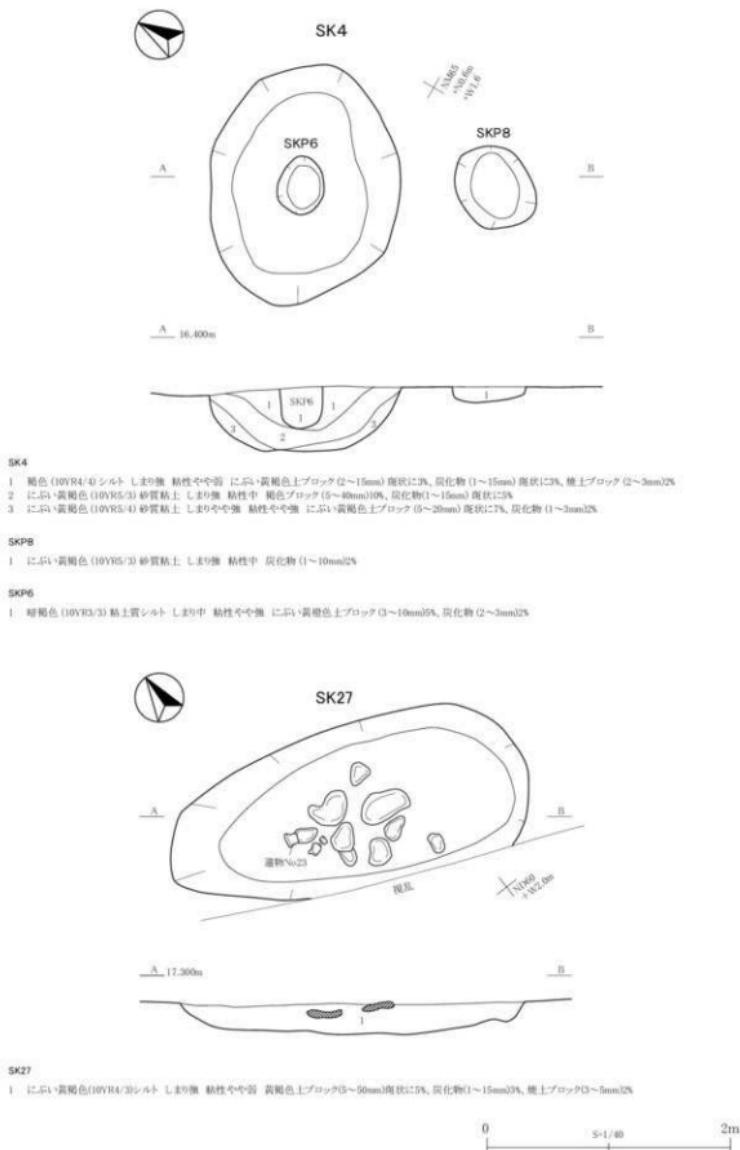
第11図 SE10井戸跡、SK14・SK30土坑



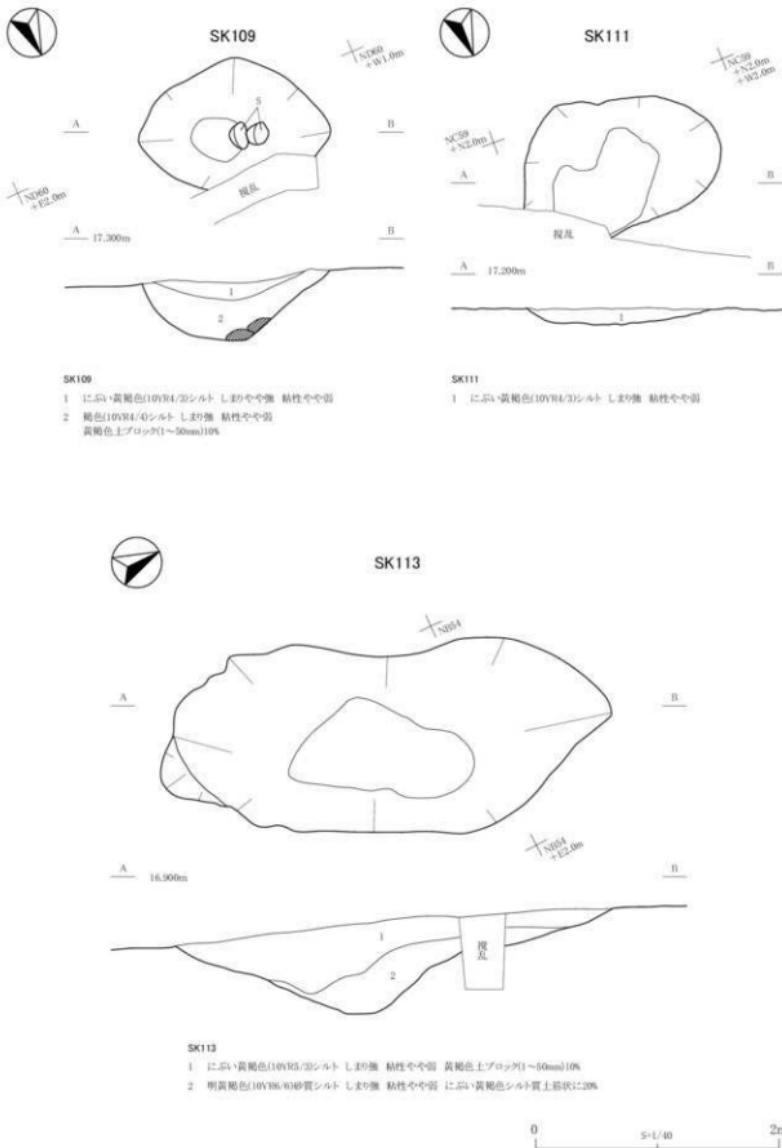
第12図 SO5・SO12カマド状遺構



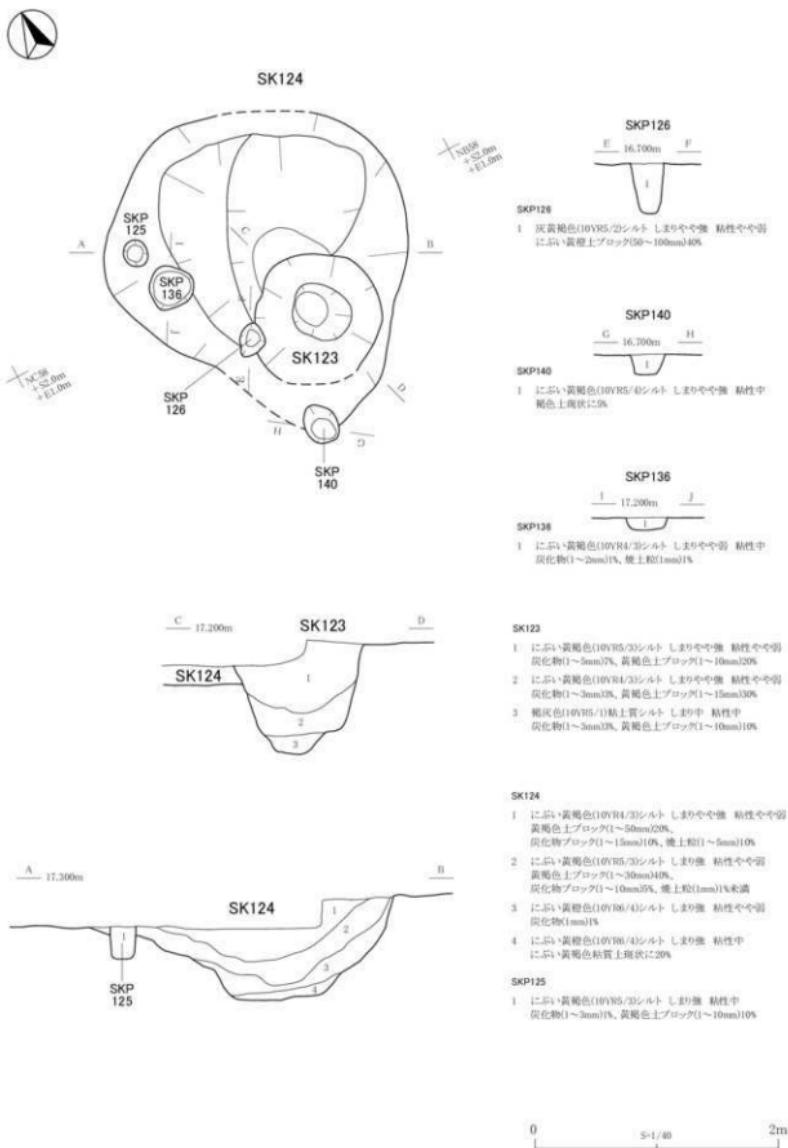
第13図 SO26カマド状遺構、SD122溝跡



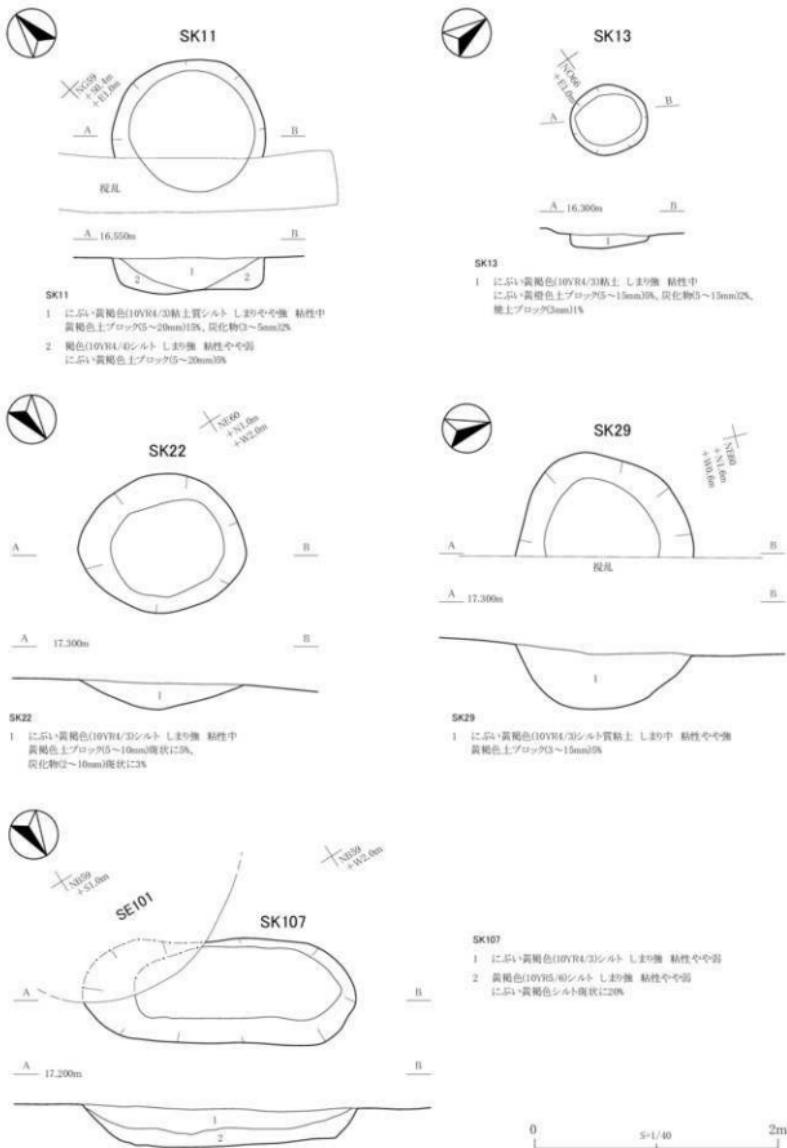
第14図 SK4・SK27土坑、SKP6・SKP8柱穴様ビット



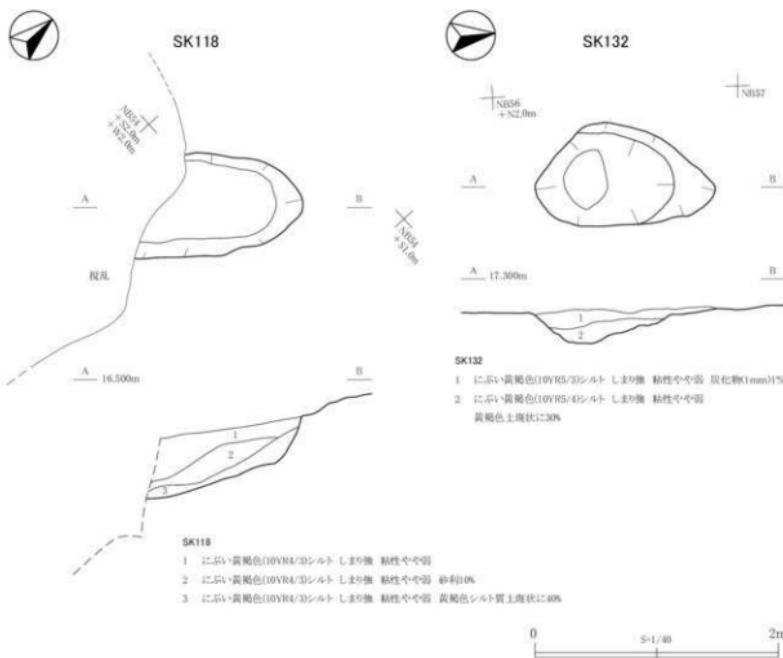
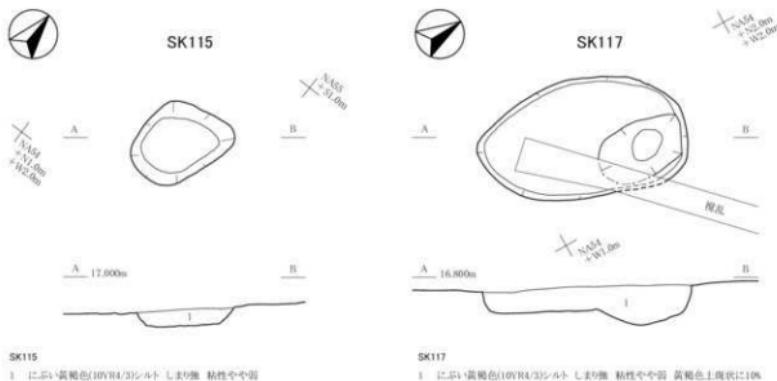
第15図 SK109・SK111・SK113土坑



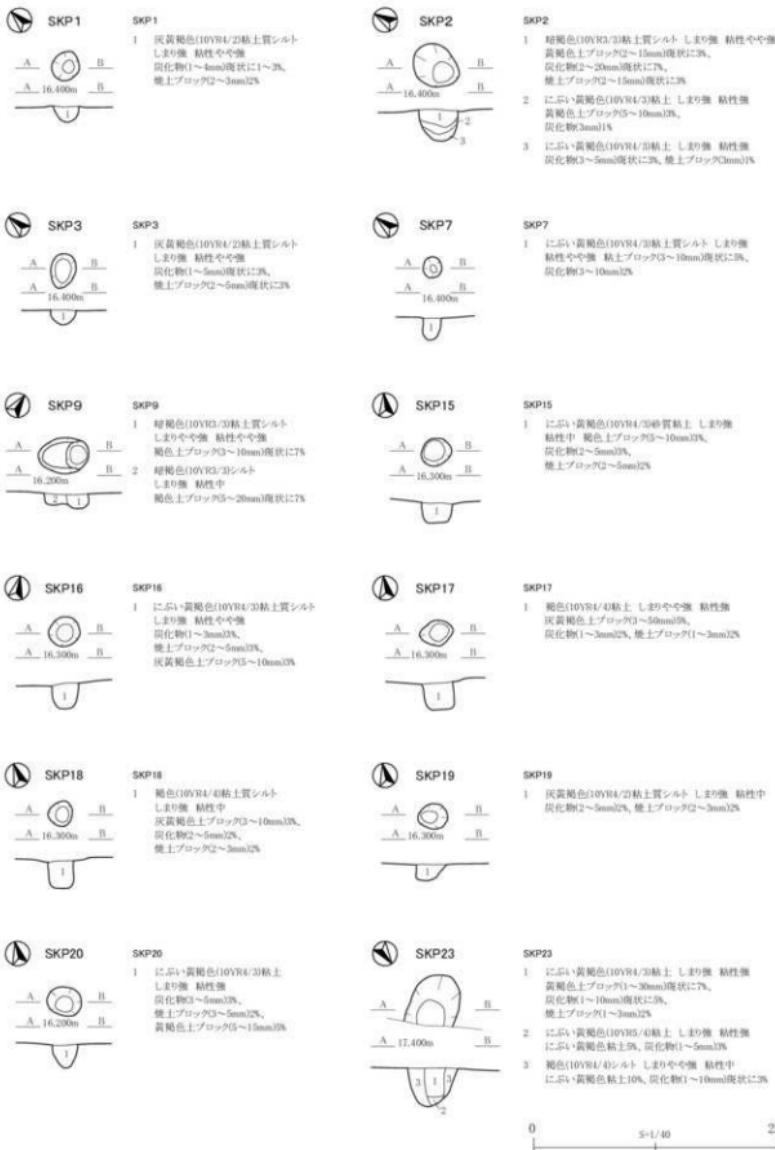
第16図 SK123・SK124土坑、SKP125・SKP126・SKP136・SKP140柱穴様ピット



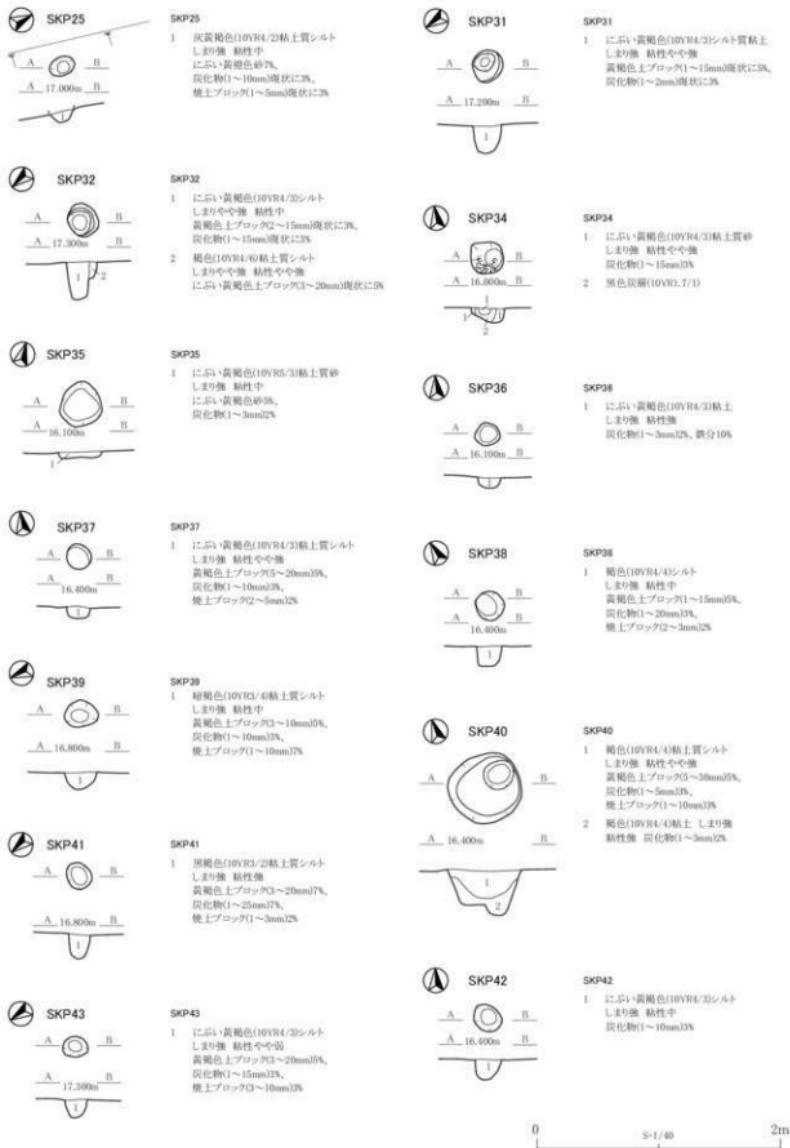
第17図 SK11・SK13・SK22・SK29・SK107土坑



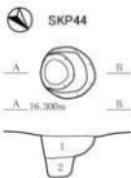
第18図 SK115・SK117・SK118・SK132土坑



第19図 柱穴様ピット(1)



第20図 柱穴様ビット(2)



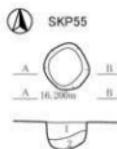
- SKP44**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
しまり強 粘性やや弱
炭化物(1~10mm)10%、
炭化物(1~5mm)3%、
堆土ブロック(1~10mm)3%
 - にぶい、黄褐色(10YR5/3)粘土
しまり強 粘性強
黄褐色土ブロック(1~10mm)5%、
炭化物(2~5mm)3%、
堆土ブロック(2~5mm)2%



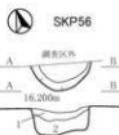
- SKP49**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
しまり強 粘性やや弱
炭化物(1~10mm)3%



- SKP45**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
しまり強 粘性やや弱
黄褐色(1~20mm)5%、
炭化物(1~5mm)3%



- SKP55**
- 褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性やや弱
炭化物(1~15mm)3%、
堆土ブロック(1~3mm)2%
 - にぶい、黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
しまり強 粘性やや弱
にぶい、黄褐色土ブロック(1~20mm)5%、
炭化物(1~5mm)3%



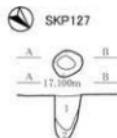
- SKP56**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性やや弱
炭化物(1~3mm)3%
 - にぶい、黄褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性中
黄褐色土ブロック(2~30mm)3%、
炭化物(2~5mm)3%



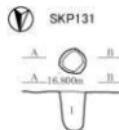
- SKP59**
- 褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性中
炭化物(1~3mm)3%



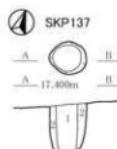
- SKP112**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性やや弱
炭化物(1mm)1%、
黄褐色土ブロック(1~8mm)15%



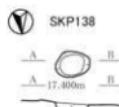
- SKP127**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性やや弱
にぶい、黄褐色シルト質土状体(1~30%、
炭化物(1mm)1%
 - にぶい、黄褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性やや弱
炭化物(1mm)1%未満



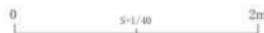
- SKP131**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
しまり強 粘性やや弱
炭化物(1mm)1%



- SKP137**
- にぶい、黄褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性やや弱
黄褐色土ブロック(1~5mm)10%
 - にぶい、黄褐色(10YR4/3)シルト
しまり強 粘性やや弱
黄褐色土ブロック(1~10mm)40%



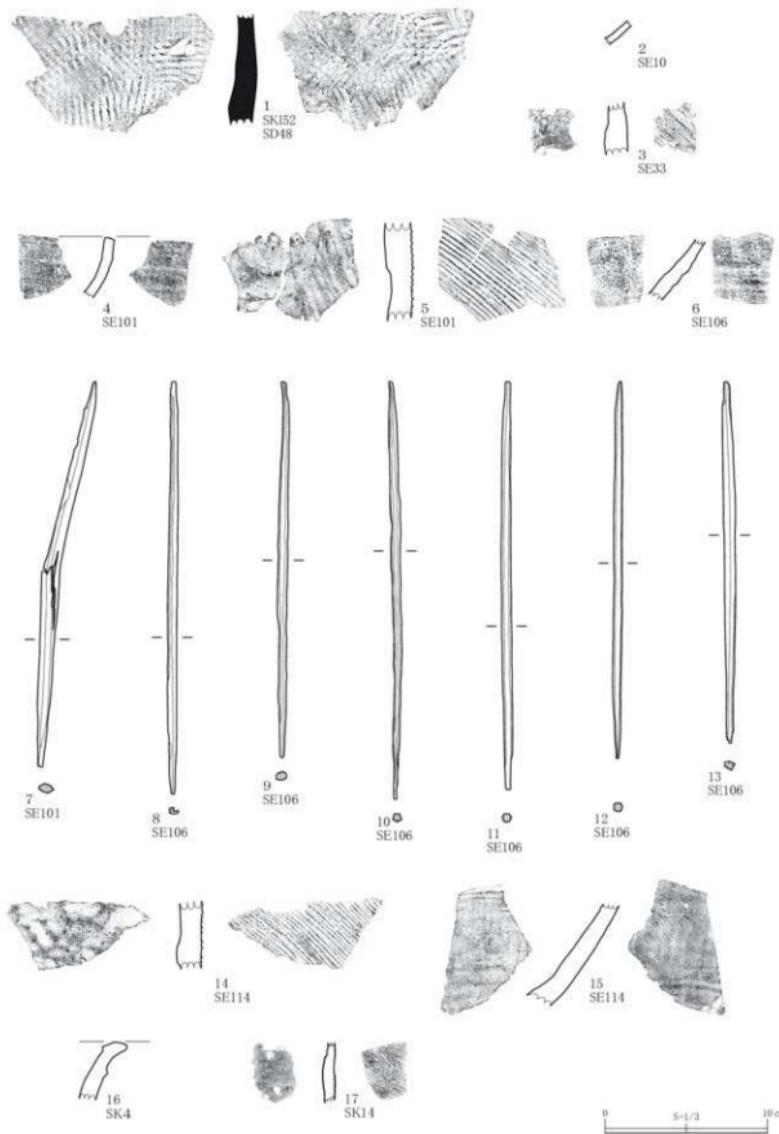
- SKP138**
- 暗褐色(10YR2/3)シルト
しまりやや強 粘性やや弱
炭化物(1mm)1%未満



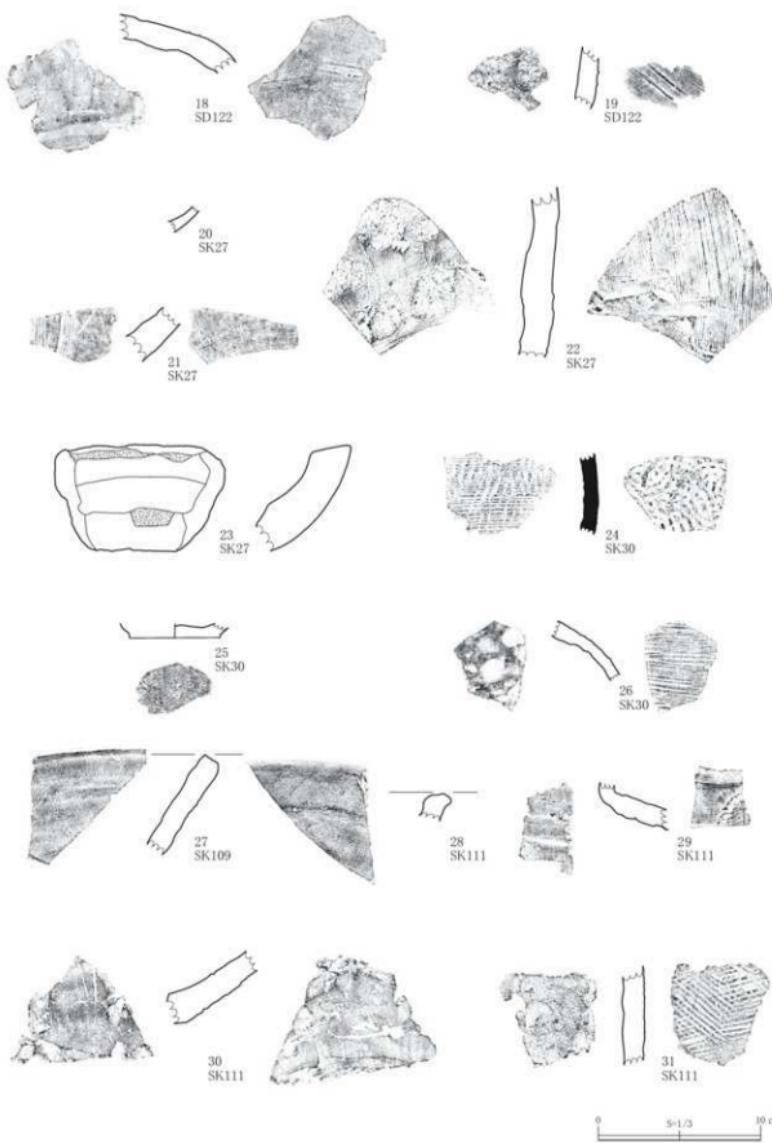
第21図 柱穴様ピット(3)

第3表 柱穴様ピット一覧表

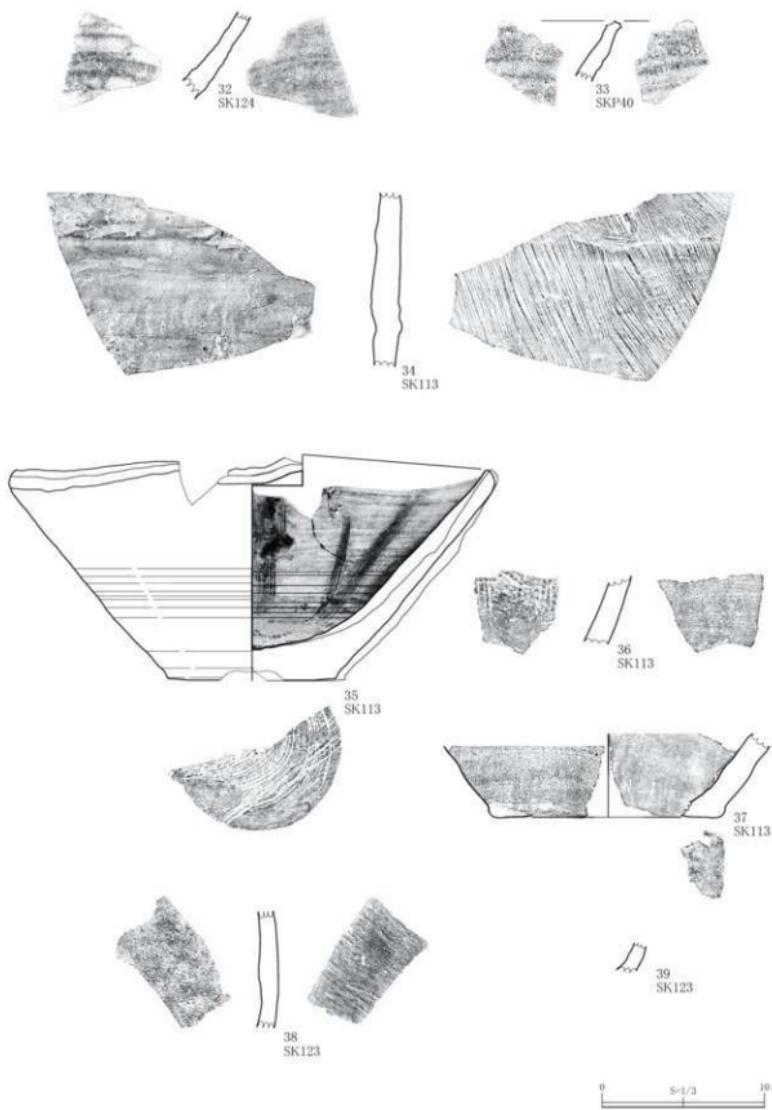
遺構No. SKP	挿図 番号	調査区	グリッド	平面形	規模(m)		底面標高 (m)	重複 (旧→新)	備考
					長軸×短軸	深さ			
1	19	西側	NL64	円形	0.25×0.22	0.13	16.16		
2	19	西側	NL64	楕円形	0.40×0.32	0.26	16.00		
3	19	西側	NK64	楕円形	0.28×0.2	0.12	16.14		
6	14	西側	NM65	楕円形	0.24×0.18	0.16	16.03	SK4→	
7	19	西側	NM65	楕円形	0.18×0.15	0.18	16.01	SK152→	
8	14	西側	NM65	楕円形	0.36×0.32	0.06	16.14	SK152→	
9	19	西側	NM64	楕円形	0.40×0.30	0.13	15.93		
15	19	西側	NO66	楕円形	0.25×0.22	0.17	15.91		
16	19	西側	NO65	円形	0.26×0.24	0.22	15.88		
17	19	西側	NN65	楕円形	0.28×0.22	0.23	15.88		
18	19	西側	NN65	円形	0.21×0.20	0.22	15.90		
19	19	西側	NN65	楕円形	0.24×0.21	0.14	15.96		
20	19	西側	NN65	楕円形	0.28×0.22	0.20	15.86		
23	19	東側	NE59	楕円形	(0.42)×0.42	0.32	16.90		
25	20	東側	NE60	楕円形	0.22×0.16	0.12	16.76		
31	20	東側	NE60	楕円形	0.28×0.24	0.24	16.90		
32	20	東側	NE60	楕円形	0.28×0.24	0.32	16.86		
34	20	西側	NO66	円形	0.30×0.28	0.12	15.70		
35	20	西側	NO65	円形	0.36×0.34	0.06	15.88		
36	20	西側	NO66	円形	0.21×0.19	0.09	15.85		
37	20	西側	NL64	円形	0.21×0.20	0.09	16.12		
38	20	西側	NL64	円形	0.24×0.22	0.17	16.04		
39	20	東側	NF59	楕円形	0.28×0.22	0.14	16.58		
40	20	西側	NL64	円形	0.61×0.59	0.38	15.82	須恵器系陶器(39)出土	
41	20	東側	NF59	円形	0.22×0.20	0.22	16.52		
42	20	西側	NL64	楕円形	0.24×0.20	0.16	16.02		
43	20	東側	NE60	楕円形	0.20×0.16	0.16	16.90		
44	21	西側	NM63	円形	0.44×0.42	0.35	15.75		
45	21	西側	NM64	円形	0.21×0.20	0.27	15.81		
49	21	西側	NN64	円形	0.21×0.20	0.13	16.13		
53	21	西側	NM64	楕円形	0.32×0.26	0.26	15.74		
54	8	西側	NM64	円形	0.50×(0.48)	0.50	15.62	SD48→	
55	21	西側	NM64	円形	0.40×0.38	0.22	15.78	SK152→	須恵器系陶器小片が出土
56	21	西側	NM65	楕円形	(0.28)×0.22	0.24	15.84		
58	5	西側	NP66	不明	-	0.24	15.92		断面でのみ確認
59	21	西側	NM65	円形	0.20×0.18	0.12	15.98		
112	21	東側	NA56	楕円形	0.30×0.24	0.14	16.06		
125	16	東側	NB57	円形	0.10×0.10	0.14	16.86	SK124→	
126	16	東側	NB57	楕円形	0.28×0.20	0.40	16.22	SK123→ SK124→	
127	21	東側	NB57	円形	0.24×0.22	0.38	16.62		
131	21	東側	NA54	円形	0.22×0.20	0.32	16.40		
136	16	東側	NB57	円形	0.36×0.36	0.10	17.00	SK124→	
137	21	東側	NA57	楕円形	0.30×0.26	0.40	16.84		
138	21	東側	NA57	楕円形	0.28×0.22	0.12	16.96		
140	16	東側	NB57	楕円形	0.34×0.26	0.16	16.44	SK124→	



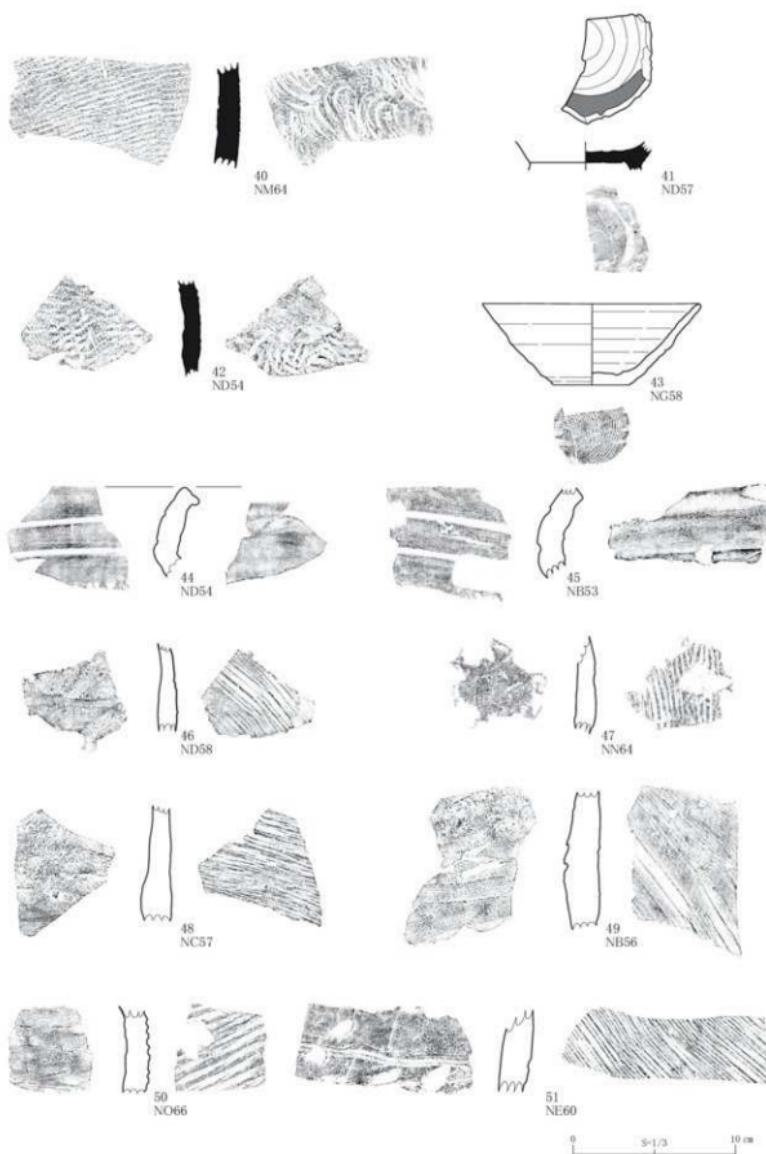
第22図 遺構内出土遺物(1)



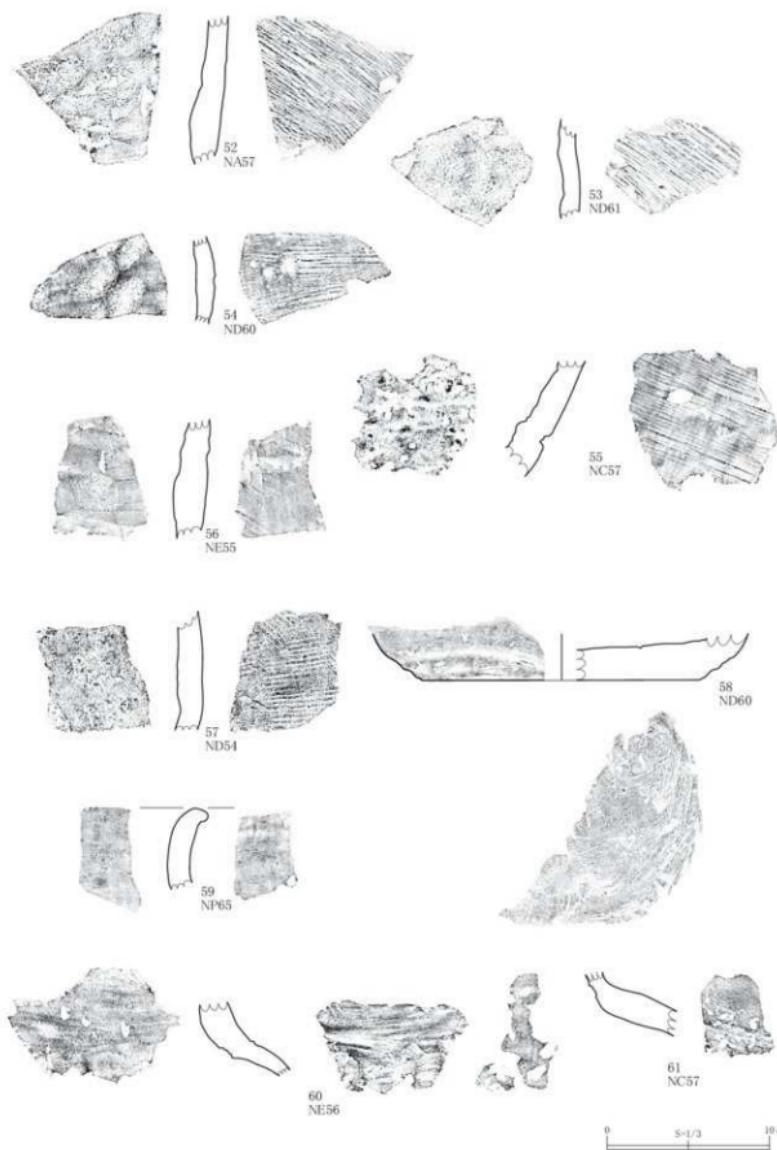
第23図 遺構内出土遺物(2)



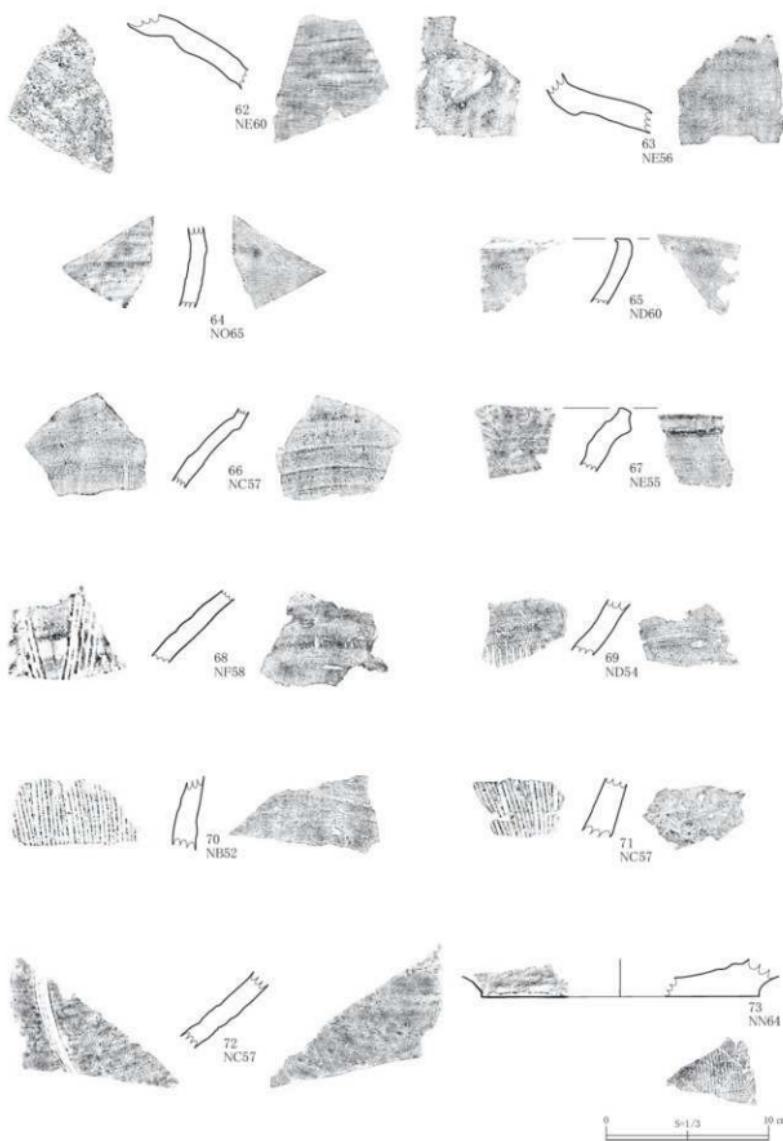
第24図 遺構内出土遺物(3)



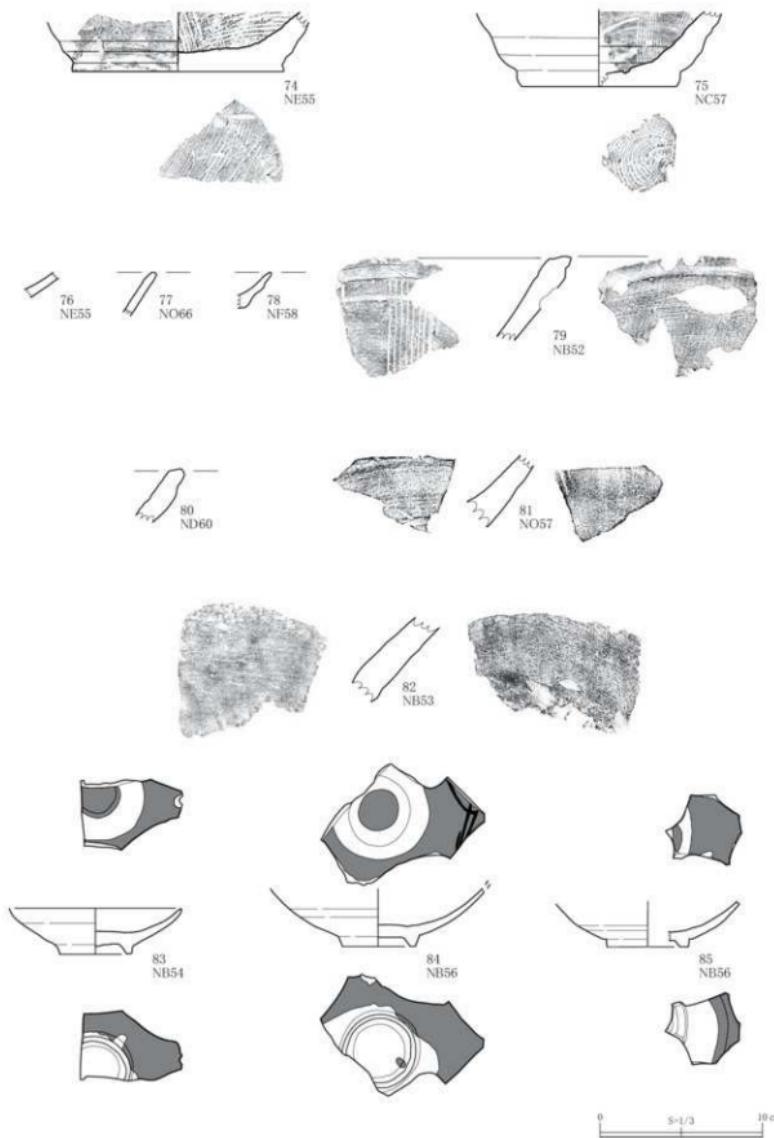
第25図 遺構外出土遺物(1)



第26図 遺構外遺出土遺物(2)



第27図 遺構外出土遺物(3)



第28図 遺構外出土遺物(4)

第4表 出土土器・陶磁器観察表(遺構内)

種類 番号	出土 場所	出土 時期	規別	形態	口径 (cm)	直徑 (cm)	高さ (cm)	底面 (cm)	調査		地質	色調	備考	
									外側	内側				
1 22	SK022 SK020	平安	直底型 縦	網目	[6.0]	150.8	平行歯文切口	円錐状凹底	やや浅	織密	外:灰白(0.5V 2/3) 内:灰黄(0.7V 2/3)			
2 22	SK016	不明	中折 青磁 縦	網目	[6.0]	13.1	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	織密	外:灰白(0.7V 1/3) 内:灰白(0.7V 6/7)		中层壁の出土 確認している。 中国産	
3 22	SK033	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	22.6	平行歯文切口	当面小孔 円錐	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 1/3) 内:灰白(0.6V 6/7)				
4 22	SK010	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[6.0]	11.9	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	白色織密 砂粒含む	外:褐紅(0.0R 4/1) 内:黒墨(0.0V 3/1)				
5 22	SK016	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	19.2	平行歯文切口	円錐状	やや浅	石英を 少量含む	外:灰一帯黒(0.2V 2/2) 内:灰白(0.5V 5/5)				
6 22	SK106	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	21.2	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 4/3) 内:灰白(0.5V 3/3)		内面に二段階の凸凹輪 内面・小量口部・井、開 などの可能性あり。		
14 22	SK114	15 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	16.3	平行歯文切口	円錐状 一帯	やや浅	石英を 少量含む	外:灰白(0.5V 4/3) 内:灰白(0.5V 5/3)				
15 22	SK114	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[6.0]	16.7	ロクロナラ (ノーパタ)	ロクロナラ	良好	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 6/3) 内:灰白(0.5V 5/3)				
16 22	SK8	1 中折 直底型 縦	不明	口縫縫	[6.0]	11.2	ロクロナラ	ロクロナラ	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 4/3) 内:灰白(0.5V 3/3)			
17 22	SK114	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	11.2	ロクロナラ +凹窓	ロクロナラ	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 5/3)				
18 23	SK122	1 中折 直底型 縦	網目	[7.7]	92.1	平行歯文切口 (一組)	円錐状 一様	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 4/3) 内:灰白(0.5V 5/3)				
19 23	SK122	1 中折 直底型 縦	網目	[14.0]	26.5	平行歯文切口 (二組)	円錐状	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 4/3)				
20 23	SK27	1 中折 青磁 縦	網目	[2.0]	3.6	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	織密	外:灰一帯灰(0.5V 5/3)				
21 23	SK27	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[3.0]	53.2	ロクロナラ	ロクロナラ +凹窓	良好	白色織密 砂粒含む	外:褐紅(0.0R 5/1) 内:灰白(0.5V 7/3)		南外 制作手跡(L3cm)		
22 23	SK27	1 中折 直底型 縦	網目	[10.0]	235.0	ロクロナラ (ノーパタ) (ノーパタ)	ロクロナラ +凹窓	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 5/3)				
24 23	SK30	1 平安	直底型 縦	網目	[5.0]	41.1	平行歯文切口 (ノーパタ)	円錐状 一帯	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 5/3)			
25 23	SK30	1 平安	直底型 縦	弧	[5.0]	14.0	15.7	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	石英を 少量含む	外:灰白(0.5V 6/3) 内:灰白(0.5V 7.0)		
26 23	SK30	1 中折 直底型 縦	網目	[5.0]	26.0	平行歯文切口	円錐	やや浅	良好	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 5/3)			
27 23	SK109	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[6.0]	29.8	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 3/3)				
28 23	SK111	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[6.0]	11.3	ロクロナラ	ロクロナラ	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 5/3)				
29 23	SK111	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	32.9	ロクロナラ	ロクロナラ	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 3/3) 内:灰白(0.5V 6/3)				
30 23	SK111	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[6.0]	107.7	ロクロナラ	ロクロナラ	やや浅	良好	石英を 少量含む	外:灰白(0.5V 6/3) 内:灰白(0.5V 6/3)			
31 23	SK111	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	94.5	平行歯文切口 (網目)	円錐状 一帯	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 3/3)				
32 24	SK128	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	47.1	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	白色織密 砂粒含む	外:非鐵(0.5V 3/3) 内:黒墨(0.0V 3/3)				
33 24	SK99	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[6.0]	26.6	ロクロナラ	ロクロナラ	やや浅	石英を 少量含む	外:灰白(0.5V 4/4) 内:灰白(0.5V 6/6)				
34 24	SK113	1 中折 直底型 縦	網目	[10.0]	390.2	ロクロナラ (ノーパタ) (ノーパタ)	ロクロナラ +凹窓	良好	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 6/2) 内:灰白(0.5V 6/6)				
35 24	SK113	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[10.0]	161.2	ロクロナラ	ロクロナラ	やや浅	白色織密 砂粒含む	外:灰白(0.5V 6/2) 内:灰白(0.5V 6/6)				
36 24	SK113	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	58.1	ロクロナラ	ロクロナラ +凹窓	良好	小織密 多孔性	外:灰白(0.5V 4/4) 内:灰白(0.5V 6/6)		内面に2段階の 工具による 内面の痕跡あり。加熱。		
37 24	SK113	1 中折 直底型 縦	口付縫 網目	[6.0]	118.2	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	織密	外:灰白(0.5V 6/6) 内:灰白(0.5V 6/6)				
38 24	SK123	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	65.8	ロクロナラ	ロクロナラ	やや浅	小織密 多孔性	外:灰白(0.5V 3/3) 内:灰白(0.5V 6/6)				
39 24	SK123	1 中折 直底型 縦	網目	[6.0]	54.4	ロクロナラ	ロクロナラ	良好	織密	外:灰白(0.5V 4/4) 内:灰白(0.5V 6/6)		中国産		

第5表 出土土器・陶磁器観察表(遺構外)

第二章 项目管理与控制

第三章 出土石制日晷观察

第5表 山工不器皿既察表								
遺物番号	拂國番号	出土土	出土層位	時代	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)
7	22	SE101	14	中世	木製品	箸	23.85	0.9
8	22	SE106	8	中世	木製品	箸	25.25	0.55
9	22	SE106	8	中世	木製品	箸	23.0	0.65
10	22	SE106	8	中世	木製品	箸	25.65	0.6
11	22	SE106	8	中世	木製品	箸	25.05	0.6
12	22	SE106	8	中世	木製品	箸	23.1	0.55
13	22	SE106	8	中世	木製品	箸	22.2	0.6

遺物 番号	補足 番号	出土 遺構	出土 層位	時代	種別	器種	部位	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	重量 (g)
23	23	SK27	I	中古	石製品	石刀(茎刀)	茎部	6.5	10.45	925.6

第8表 出十鉛閣連遺物觀察表

遺物番号	図版番号	出土位置	出土層位	種別	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	磁石
86	11	SK109	14	鉄滓	97.6	5.5	4.4	○
87	11	SK27	8	フイゴ羽口	52.9	4.8	5.0	×
88	16	NE58	II	マグネタイト系遺物	85.9	5.1	3.6	×

第4章 理化学的分析

1 はじめに

秋田県大仙市の峰吉川中村遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2 整理作業

測定試料の情報、調製データは第9表のとおりである。試料は、SO5の8層出土の炭化草本？(試料No.1:PLD-43199)、SO12の9層出土の炭化草本？(試料No.2:PLD-43200)、SO26の7層出土の炭化材(試料No.3:PLD-43201)、SE10の13層出土の炭化材(試料No.4:PLD-43202)、SE33の10層出土の炭化材(試料No.5:PLD-43203)、SE57の8層出土の炭化材(試料No.6:PLD-43204)、SE106の3層出土の炭化材(試料No.7:PLD-43205)、SE106の10層出土の生材(試料No.8:PLD-43206)の、合計8点である。なお、炭化材と生材の試料はいずれも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

第10表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第29図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正是OxCal4.4(較正曲線データ:IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第9表 測定試料及び処理一覧表

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-43199	遺構:SO5 層位:8層 試料No.1	種類:炭化物(草本?) 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L) 処理備考:土混じり ガス化備考:鉛物混じり
PLD-43200	遺構:SO12 層位:9層 試料No.2	種類:炭化物(草本?) 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L) 処理備考:土混じり ガス化備考:鉛物混じり
PLD-43201	遺構:SO26 層位:7層 試料No.3	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-43202	遺構:SE10 層位:13層 試料No.4	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-43203	遺構:SE33 層位:10層 試料No.5	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-43204	遺構:SE57 層位:8層 試料No.6	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-43205	遺構:SE106 層位:3層 試料No.7	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-43206	遺構:SE106 層位:10層 試料No.8	種類:生材 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)

4 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち、 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については小林(2013)を参照した。

SO5の8層出土の炭化草本?(試料No.1:PLD-43199)は、1325–1354 cal AD (30.85%)および1393–1424 cal AD (64.60%)の暦年代を示した。これは14世紀前半~15世紀前半で、鎌倉時代~室町時代に相当する。

SO12の9層出土の炭化草本?(試料No.2:PLD-43200)は、390–350 cal BC (34.83%)および306–208 cal BC (60.62%)の暦年代を示した。これは弥生時代前期~中期に相当する。

第10表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果一覧表

測定番号 +A2:F11	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-43199 試料No.1	-25.73 \pm 0.25	552 \pm 20	550 \pm 20	1329-1335 cal AD (9.32%) 1396-1420 cal AD (58.95%)	1325-1354 cal AD (30.85%) 1393-1424 cal AD (64.60%)
PLD-43200 試料No.2	-27.46 \pm 0.26	2253 \pm 22	2255 \pm 20	385-356 cal BC (29.81%) 280-254 cal BC (22.88%) 249-232 cal BC (15.58%)	390-350 cal BC (34.83%) 306-208 cal BC (60.62%)
PLD-43201 試料No.3	-27.32 \pm 0.23	782 \pm 20	780 \pm 20	1229-1245 cal AD (30.72%) 1255-1273 cal AD (37.55%)	1224-1275 cal AD (95.45%)
PLD-43202 試料No.4	-24.05 \pm 0.27	805 \pm 19	805 \pm 20	1224-1234 cal AD (19.37%) 1237-1261 cal AD (48.89%)	1220-1269 cal AD (95.45%)
PLD-43203 試料No.5	-28.05 \pm 0.27	924 \pm 21	925 \pm 20	1047-1083 cal AD (36.95%) 1095-1103 cal AD (5.68%) 1125-1141 cal AD (12.92%) 1147-1162 cal AD (12.72%)	1037-1175 cal AD (94.99%) 1196-1198 cal AD (0.46%)
PLD-43204 試料No.6	-25.45 \pm 0.24	787 \pm 19	785 \pm 20	1228-1246 cal AD (35.71%) 1254-1270 cal AD (32.56%)	1223-1274 cal AD (95.45%)
PLD-43205 試料No.7	-24.97 \pm 0.25	837 \pm 20	835 \pm 20	1179-1191 cal AD (13.44%) 1204-1230 cal AD (38.94%) 1243-1258 cal AD (15.89%)	1168-1170 cal AD (0.80%) 1175-1196 cal AD (20.29%) 1198-1263 cal AD (74.36%)
PLD-43206 試料No.8	-26.73 \pm 0.27	834 \pm 20	835 \pm 20	1180-1188 cal AD (8.57%) 1210-1232 cal AD (35.77%) 1240-1260 cal AD (23.92%)	1168-1170 cal AD (0.61%) 1175-1196 cal AD (16.56%) 1198-1265 cal AD (78.28%)

SO26の7層出土の炭化材(試料No.3:PLD-43201)は、1224-1275 cal AD (95.45%)の暦年代を示した。これは13世紀代で、鎌倉時代に相当する。

SE10の13層出土の炭化材(試料No.4:PLD-43202)は、1220-1269 cal AD (95.45%)の暦年代を示した。これは13世紀代で、鎌倉時代に相当する。

SE33の10層出土の炭化材(試料No.5:PLD-43203)は、1037-1175 cal AD (94.99%)および1196-1198 cal AD (0.46%)の暦年代を示した。これは11世紀前半～12世紀末で、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。

SE57の8層出土の炭化材(試料No.6:PLD-43204)は、1223-1274 cal AD (95.45%)の暦年代を示した。これは13世紀代で、鎌倉時代に相当する。

SE106の3層出土の炭化材(試料No.7:PLD-43205)は、1168-1170 cal AD (0.80%), 1175-1196 cal AD (20.29%), 1198-1263 cal AD (74.36%)の暦年代を示した。これは12世紀後半～13世紀後半で、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

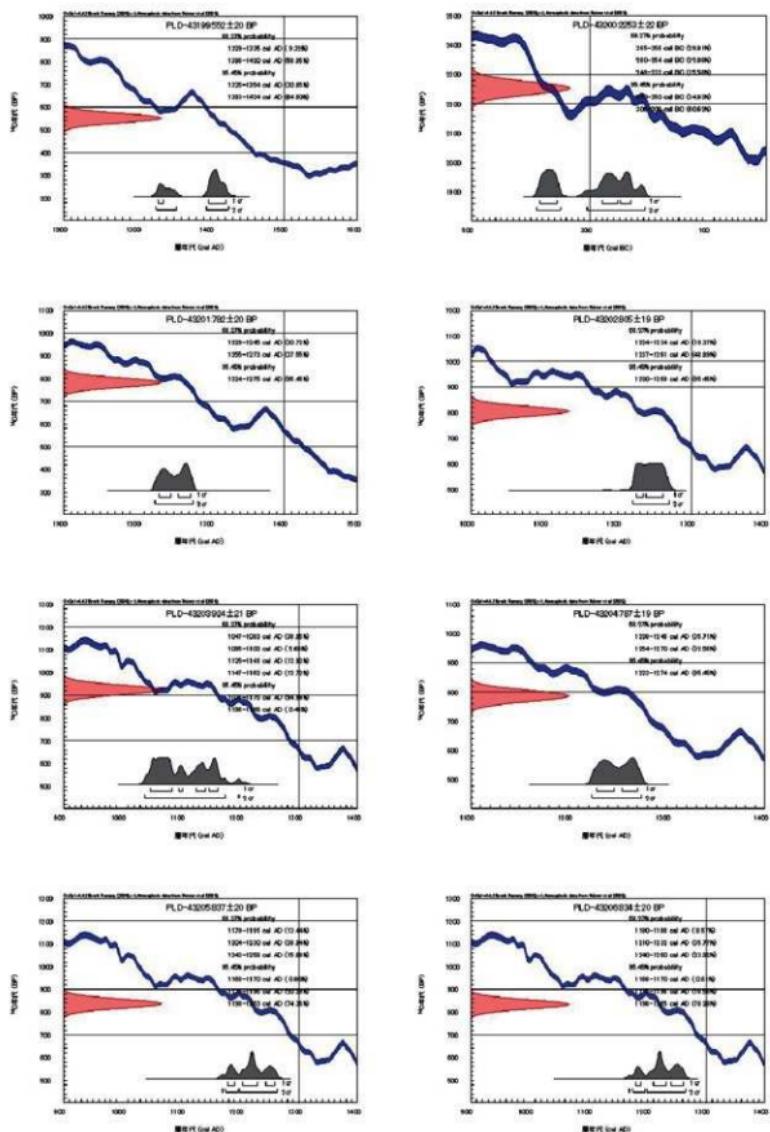
SE106の10層出土の生材(試料No.8:PLD-43206)は、1168-1170 cal AD (0.61%), 1175-1196 cal AD (16.56%), 1198-1265 cal AD (78.28%)の暦年代を示した。これは12世紀後半～13世紀後半で、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の木材試料(炭化材5点、生材1点)は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。した

がって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。また、炭化草本？の2点は、草本が枯死もしくは伐採された年代を示している。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337–360.
- 藤尾慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 古川弘文館.
- 小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55–82, 雄山閣.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」: 3–20, 日本国第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capone, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41.
<https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



第29図 历年較正年代グラフ(参考)

第5章 総括

峰吉川中村遺跡の本発掘調査は、維物川上流河川改修事業(中村芦沢地区)に伴い令和2年度に実施し、平成26年度の第一次調査と合わせて事業範囲内全ての調査を終えることができた。調査の結果、縄文時代、平安時代、中世、近世にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。本章ではその中でも、最も多くの遺構・遺物が検出され活発な活動があったと考えられる中世を中心まとめ、第一次調査の成果と併せて遺構の変遷を整理することで、発掘調査の総括としたい。

第1節 中世の出土遺物について

中世の出土遺物には、青磁、須恵器系陶器、瓷器系陶器、木製品、石製品、鉄関連遺物がある。このうち、点数・重量ともに須恵器系陶器が最も多く、重量では全体の81.6%を占める。

1 須恵器系陶器

出土した須恵器系陶器を器種別にみると、甕23点、壺11点、片口鉢21点、器種不明3点である。以下、器種別に整理する。

(1) 甕

全て破片資料であり器形での検討是不可能である。口縁部は3点あり、口径が復元できるものではなく、太く短い形態をとる。底部は1点(58)のみである。底面はヘラ状工具でナデられており、ハケ目を部分的に残し、砂底である。胴部は叩きによって成形され、平行線の打圧痕が認められる。条線の粗いものと密なものの2種類に分かれる。前者のうち19・49・56に南外窯跡群の特徴である二筋平行線文が認められる。また、後者のうち31と57が綾杉状になるものの、全体的に打圧痕のバリエーションは少ない。22・34は内面に円礫の当て具痕が認められることから叩きによって成形されていることが分かるが、その後外面を縦方向のナデによって調整し、ハケ目を残している。34はさらに内面を横方向のナデによって當て具痕の一部が消されている。打圧痕や胎土から3・6・19・22・28・34・45・46・48・49～56・58は南外産と考えられる。

(2) 壺

全て断片的な破片資料であり器形での検討是不可能である。また、口縁部が1点のみで、口径を復元できるものがない。口縁部はロクロナデ、頭部付近は叩きによって成形されている。當て具は円礫と考えられ(23・62・63)、ナデにより痕跡を消しているもの(19・60)もある。60は二筋平行線文の打圧痕が認められる。その他19・26・29・38・59・61～64は胎土から南外産の可能性が指摘できる。32のみ胎土が異なり小礫を多く含み、色調は黒みが強い。

(3) 片口鉢

35のみ口縁部から底部まで、全体の1/2残存している資料である。口径・底径とともに復元値ではあるが、器高・口径は珠洲編年II¹¹期の片口鉢大鉢の法量と合致する。また、高口指数が46.5、底口指数が37.7であり、高口指数がわずかに上回るもの標準型(1類)に近い器形である。口縁部は外傾し、内端を爪状に仕上げる。また、底側外面に一周するケズリ調整が施された痕跡が段としてみられ、珠洲窯と共通した成形技術と考えられる。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後にヘラ状工具によるナデの痕跡が認められ、一部ハケ目がみられる。注口部は指2本でつくり出される。卸し目は3条幅0.8cm～8条幅1.8cmで内面を16等分するよ

う施されている。胎土、底部切り離し技法から南外産の片口鉢と考えられる。珠洲編年II期に並行し、13世紀前半の所産と推定される。近世の遺構から出土し、内面がかなり摩耗していることから、長期間に渡って使用されたものと推定される。

その他は破片資料であり器形による検討が不可能であるが、器厚から大型と小型の2種類に分かれ、4・39・65・66は小型に該当する。口縁部片が5点あるが、いずれも口径は復元できない。口縁部形態は外傾する方頭(4)、外傾して内端を爪状に仕上げ、口唇部がわずかに座むもの(27)、水平につくり出し内端を爪状に仕上げるもの(65)、外傾して外側に面を取るもの(67)、不明(39)等である。卸し目が確認できるものは21・27・30・68~72・74・75である。69~71・74は内面全体を埋めるように卸し目を施す珠洲編年V期以降に多くみられる特徴を有する。底部片は3点あり、73・74に静止糸切り、75に回転糸切りの痕跡が認められる。75は円盤状の底部に粘土紐を巻き上げた痕跡が段として残る粗雑なつくりである。底部切り離し技法や卸し目、胎土等から4・21・27・34・65・66・67・72・75は南外産と考えられる。

以上、出土須恵器系陶器の約71%が南外産と考えられ、遺跡近くから日常使用するものを調達していたと推定される。南外窯跡群の操業が終わった後は、珠洲産と思われる外部からの搬入品も使用している。

2 その他の中世遺物

(1) 青磁

青磁は5点出土しており、いずれも小片のため産地の同定や分類、年代の特定までに至らなかった。20は内面に櫛書き文とみられる文様から、龍泉窯系の可能性がある。

(2) 瓷器系陶器

瓷器系陶器には瀬戸・美濃産の施釉陶器小皿類(78)と越前産の鉢類がある(79・80)。78は口縁部の小片であり器種の断定には至らないが、大窯期の丸皿であると考えられる。79・80は卸し目を有する擂鉢であり、口縁部の形状や沈線の位置等から15世紀末から16世紀の所産と考えられる。

(3) 茶臼

SK27土坑から茶臼の受け皿部分(23)が出土している。共伴する遺物には青磁(20)、南外産と考えられる須恵器系陶器(21・22)があり、遺構は13世紀に属すると推定される。挽き臼類は中世の13世紀代に登場し、14・15世紀に増加しながら16世紀以降にピークを迎える。本遺跡出土の茶臼は初現期のものである可能性がある。なお、本県内で茶臼の類例は14世紀以降の遺跡である鶴沼城跡で4点確認できる。

以上、13世紀代は南外産の須恵器系陶器を使用し、南外窯跡群の操業終了以降は珠洲窯など他地域の須恵器系陶器、さらにその後は瀬戸・美濃大窯期の施釉陶器、越前産の擂鉢等を利用しているという変遷が確認でき、出土量がそれほど多くない中でも県内中世遺跡の標準的な流通の様子を看取できる。

第2節 中世の遺構について

1 井戸跡

(1) 構造

中世と考えられる井戸跡を6基検出した。いずれも木枠は確認できず、素掘りの井戸であったと推定される。SE10・33井戸跡については湧水する深度であるV層まで到達していないことから、未使用の井戸跡であった可能性がある。それ以外の4基については、遺構内堆積土の観察から人為的に埋め戻されているという共通点がある。

(2) 遺構内堆積土

SE101・SE106・SE114井戸跡では堆積土中で炭化物を多く含む黒色土が薄く堆積している状況を確認した。焼土は形成されていないため、そこで燃焼があったかどうかは不明であるが、埋め戻す途中に何らかの行為が行われていた可能性がある。同様の事例は本遺跡第一次調査の井戸跡の他、横手市に所在する柴崎遺跡の13世紀と思われる井戸跡でも確認されており、この時期の井戸跡にみられる特徴である可能性がある。なお、SE114井戸跡では最下層と10層に堆積する炭化物の放射性炭素年代測定を行っている。その結果、二つの試料が示す年代値にはほとんど差がなく、3層が経年の土壤化による黒色化ではなく、井戸を埋め戻す途中の比較的短時間での堆積であることが推測される。

(3) 時期

出土遺物からみると、SE33・101・106・114井戸跡から南外産と考えられる須恵器系陶器が出土しており、主体は13世紀である。放射性炭素年代測定の結果は、SE10・57井戸跡は13世紀代、SE33井戸跡は11世紀前半から12世紀末、SE106井戸跡が12世紀後半から13世紀後半という結果が得られている。これらを踏まえると、西側調査区に存在するSE33のみ他の井戸跡よりも古い可能性があり、それ以外東側調査区の井戸跡は同時存在の可能性も含め13世紀代を主体に使用されていたと考えられる。

2 カマド状遺構

(1) 構造

3基のカマド状遺構を検出した。いずれも燃焼部の主軸線上に煙道が抜ける形状をとる。SO5とSO12カマド状遺構は焚き口部の前面に前庭部があり、そこに掻き出された炭化物が堆積している。燃焼部と煙道部は被熱により、焼土化しており、一定期間使用されたと考えられるが、底面は焼土化していないのが特徴である。SO5の南西約1.5m、SO12の南東約1mには焼土ブロックが二次的に堆積しており、どちらかのカマド状遺構から掻き出されたものである可能性がある。

(2) 構築方法

残存状態の良いSO5カマド状遺構から構築方法の検討を行う。構築方法は掘り抜き式と粘質土を積み上げて構築するものとが知られている。^(註5) 後者は燃焼部を円形に掘り下げ、側壁部分に板材を内傾させて立て、板材と燃焼部の掘り方の間に白色粘土を充填させる。板材を支えるための細棒が垂直及び斜位に立てられ、その痕跡が径2~3cmの円形に残るものがある。煙道部も同様の手法で掘り方上面を高架させ、乾燥が進んだ段階で火入れを行ったと想定されている。

SO5カマド状遺構は、燃焼部の底面に板材を押さえた痕跡ではなく、白色粘土を積み上げた痕跡も認められないことから、掘り抜き式が想定される。しかし、燃焼部から煙道部は掘り抜きで貫通させることができ物理的に難しい形状をしており、構築方法は不明と言わざるを得ない。ただし、遺構断面の観察から、燃焼部が被熱して焼土化した部分の土が周囲の土よりも粘性が高いこと、第12図①層に炭化物が混入し、掘り方内が埋め戻した土であると推定されること等から、白色粘土は用いていないものの、掘り抜き式ではなく一度掘り下げて燃焼部と煙道を積み上げて構築した可能性を指摘できる。

本遺跡におけるカマド状遺構の構築方法については推測の域を出ないが、SO5カマド状遺構の記録は、今後のカマド状遺構の調査や解釈に、新たな視点を提示できる例となろう。

(3) 時期

遺物が出土することがほとんどない遺構であり、本調査でも3基のカマド状遺構から遺物は出土していない。

平成26年度の調査ではカマド状遺構から須恵器系陶器や青磁片が出土していることから中世に属する遺構であることは想定できる。放射性炭素年代測定によれば、SO5カマド状遺構は14世紀後半から15世紀前半、S O26カマド状遺構は13世紀代の結果が得られており、カマド状遺構については東側調査区の方が古い結果となる。

(4) 用途

これまでカマド状遺構の用途としては、灰採取・織維生産・染め物等の論がある。しかし、考古学的にそれらを示す根拠は乏しく、未だ用途は不明と言わざるを得ない。構造から、何かを煮沸するものであると言えるが、全てのカマド状遺構が同じ用途・機能とは限らない。用途を検討するためには、どのような遺構と同時に存在するかを分析していく必要がある。本遺跡の場合、放射性炭素年代測定の結果では、SO26カマド状遺構とSE57井戸跡の年代値は限りなく近く、同時に機能していた可能性がある。その一方で、本調査区内からは、住居となり得る建物跡が検出されておらず、居住空間ではないことが想定される。SO26とSE57が共存していたとすれば、今回検出したカマド状遺構は水を利用して何かを生産するための遺構と考えられる。^[21.6]

第3節 峰吉川中村遺跡の遺構変遷

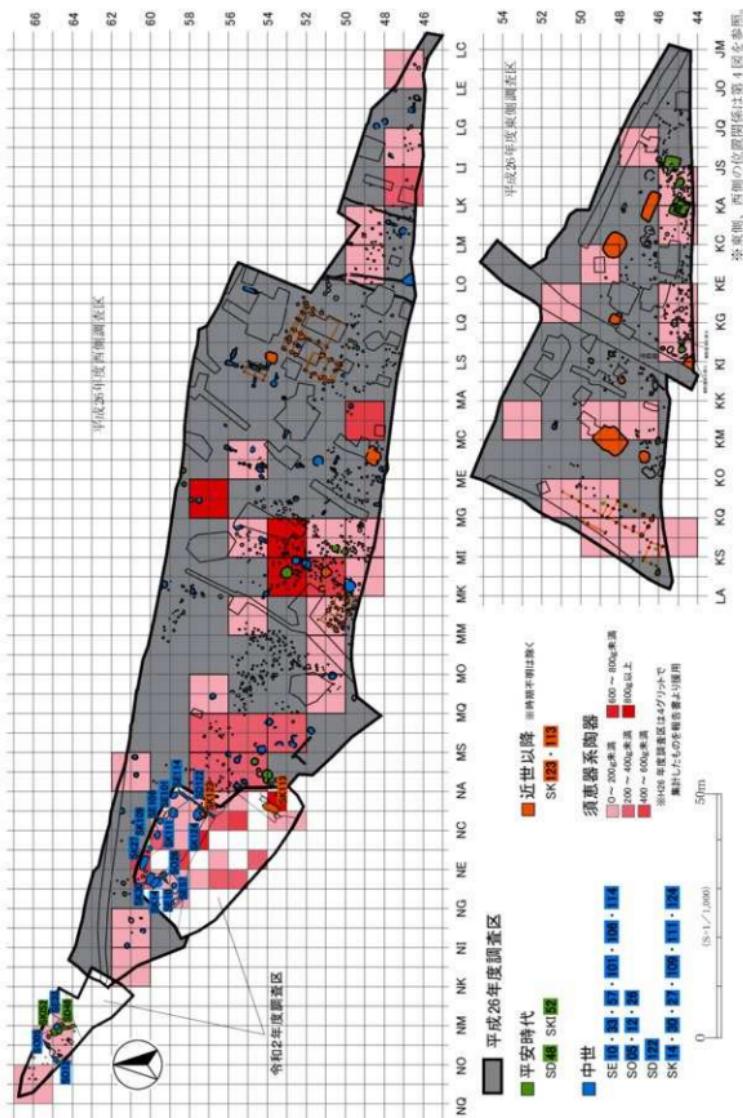
1 令和2年度調査区の使われ方

本調査区から検出した遺構を整理すると、平安時代に属するものにSKI52竪穴状遺構とSD48溝跡があり、これらは遺跡西端の自然堤防の末端に位置する。自然堤防上には古代の遺構は確認できず、微高地から低地への地形変化点を意識的に利用したことがうかがわれる。中世になると本調査区は活発に利用されている。しかし、前述のとおり、建物跡が見つかっておらず集落の居住域ではないことが想定される。近世になつても自然堤防上の利用は継続されるが、中世をピークに遺構数はかなり減少している。

2 遺跡全体の遺構変遷

平成26年度調査区も含めた遺構の変遷と須恵器系陶器の出土量を示したのが第30図である。平安時代では遺跡西側に竪穴状遺構があり、東側では墨書き土器の出土が多く、竪穴建物跡も見つかっている等、遺跡の両端を主に利用していることが分かる。中世になると中央から西側にかけて遺構が広く分布する。近世以降は中央から東側に遺構分布の中心が移っていることが分かり、各時代の自然堤防上の使われ方を読み取ることができる。

遺跡内の活動がピークを迎える中世に焦点を当てると、井戸跡、カマド状遺構、火葬施設、火葬墓、溝跡、焼土遺構を検出しているが、竪穴建物跡や掘立柱建物等の建物跡は見つかっていない。日用雑器である須恵器系陶器が一定量出土していることから、居住城を遺跡調査区外に求めるには無理があるように思われる。須恵器系陶器の出土量が多いME～MKラインやMQ～NAライン周辺には、時期不明の柱穴様ビットが数多く確認されており、この柱穴様ビット群の中に中世の居住施設となり得る掘立柱建物が隠れている可能性がある。この辺りを居住城と仮定すれば、遺構の空闊地を挟み、令和2年度調査区を含むMSライン以西が集落の生産域に相当する可能性がある。また、LMライン以東にも周囲に建物跡や柱穴様ビットを作わないカマド状遺構と井戸跡の分布がみられ、同様に生産域となるかもしれない。そのようにみれば、SD122溝跡や平成26年度調査のSD200・201溝跡は居住城と生産域を区画するための溝であった可能性もある。



第30図 遺構変遷及び須恵器系陶器出土量分布図

- 註1 実測図上の復元値を基に算出。実物の口径最大値は30.9cmであり、この値を用いれば高口指数44.7、底口指数34.3となり、珠洲編年II₂期の高口指数36～44、底口指数30～43により近い形状となる。
- 註2 断面の形状から、底側外面にケズり調整が施されていると考えられるが、その後にロクロナデが施されており、器面からケズりの痕跡は確認できない。
- 註3 佐々木健策「挽き臼類の展開にみる中世」『国立歴史民俗博物館研究報告—中世の技術と職人に関する総合的研究—』第210集 2018(平成30)年
- 註4 横手市教育委員会『柴崎遺跡—農地集積加速化基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
横手市文化財調査報告第53集 2021(令和3)年
柴崎遺跡SE1132でも埋め戻し土と考えられる堆積土中に炭化物主体の9層が薄く堆積している。
- 註5 青森県埋蔵文化財センター『境間館遺跡発掘調査報告書—中小河川平川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』1987(昭和62)年
小林克「岳下遺跡検出の窓跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 秋田県埋蔵文化財センター 1995(平成7)年
本遺跡よりも雄物川上流に位置する大仙市岳下遺跡では、白色粘土を用いてカマド状造構を構築していることが確認されている。
- 註6 青森県教育委員会『宮田館遺跡Ⅲ・米山(2)遺跡Ⅱ—青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書—』
青森県文化財調査報告書第344集 2003(平成)15年

参考文献

- 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 宿業2 中世・近世 濱戸系』愛知県 2007(平成19)年
- 秋田県教育委員会『鶴沼城跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第73集 1980(昭和55)年
- 秋田県教育委員会『峰吉川中村遺跡—雄物川上流河川改修事業(中村芦沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第505集 2016(平成28)年
- 池谷初恵・小野正敏・岩本康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告—中世東アジア海域における窯の動態に関する総合的研究—』第226集 国立歴史民俗博物館 2021(令和3)年
- 茅野嘉雄「カマド状造構の集成と今後の研究課題について」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第13号 2008(平成20)年
- 太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集 2000(平成12)年
- 福井県教育庁埋蔵文化財センター『越前燒総合調査事業報告』福井県教育庁埋蔵文化財センター所報6 2016(平成28)年
- 吉岡康暢『中世須恵器の研究』吉川弘文館 1994(平成6)年



遺跡全景（真上が北、1975年撮影）



遺跡遠景（南→）



遺跡遠景（東→）



調査区全景（真上が北）



西側調査区完掘状況（南西→）

図版4
東側調査区完掘状況・基本層序



東側調査区完掘状況（東→）



基本層序（西側調査区 A-B）（南→）



基本層序（西側調査区 C-D）（南東→）



基本層序（西側調査区 E-F）（南→）



基本層序（東側調査区 A-B）（南東→）





SE33 土層断面（南→）



SE33 完掘状況（南→）



SE57 土層断面（西→）



SE57 完掘状況（西→）



SE101 土層断面（西→）



SE101 完掘状況（西→）



SE106 土層断面（北→）



SE106 完掘状況（北→）



SE114 土層断面（北→）



SE114 炭化物層検出状況（北→）



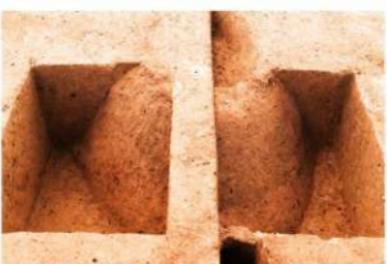
SE114 土層断面（北→）



SE114 完掘状況（北→）



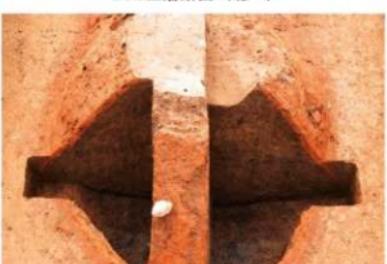
SO5検出状況（南西→）



SO5 土層断面（北→）



SO5 土層断面（西→）



SO5 土層断面（北→）



SO5 土層断面（西→）



SO5 底面検出状況（南→）



SO12 土層断面（西→）



SO12 底面検出状況（南→）



SO26 土層断面（東→）



SO26 完掘状況（東→）

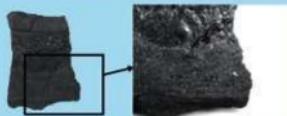


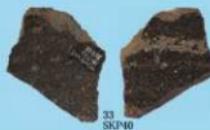
SD122 検出状況（北→）



SD122 完掘状況（北→）













51



52



53



54



55



56



58

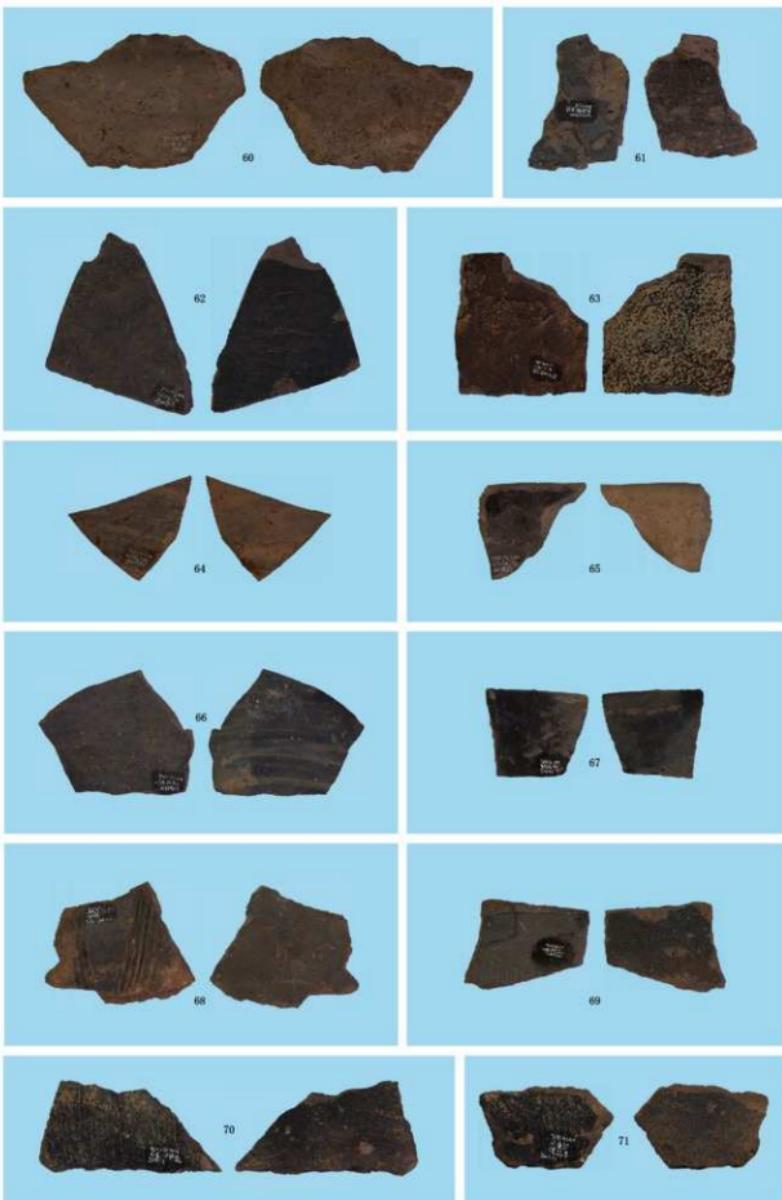


57



59







報 告 書 抄 錄

秋田県文化財調査報告書第524集
峰吉川中村遺跡（第2次）
—雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書II—

印刷・発行 令和4年3月
編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話 (0187)69-3331
FAX (0187)69-3330
発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話 (018)860-5193
印 刷 株式会社 仙北印刷所

